

## 2.長岡京跡右京第952次(7ANGYT-7地区)

### ・井ノ内遺跡発掘調査報告

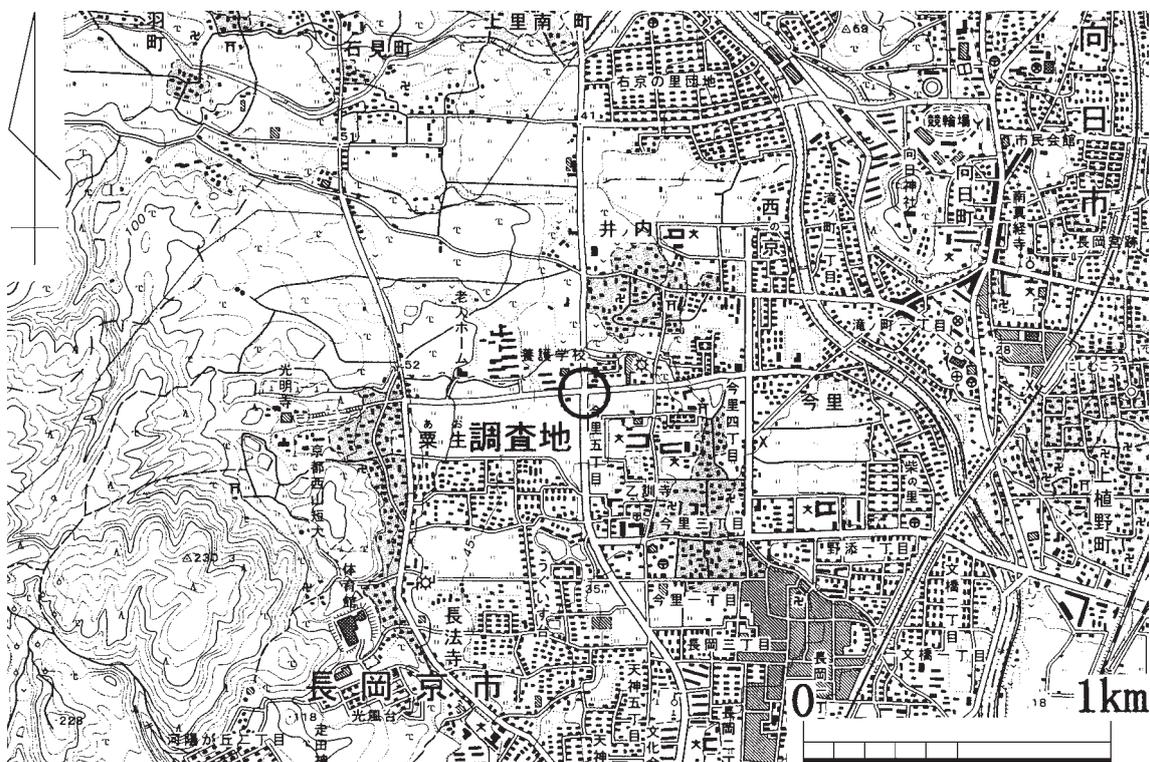
#### 1. はじめに

この調査は、平成20・21年度主要地方道大山崎大枝線地方道路交付金業務委託に係る埋蔵文化財発掘調査に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したもので、現地調査は平成20年9月24日から平成21年1月29日のほぼ4か月を要して実施し、整理・報告作業は現地調査終了後の平成21年度に実施した。調査面積は680㎡である。

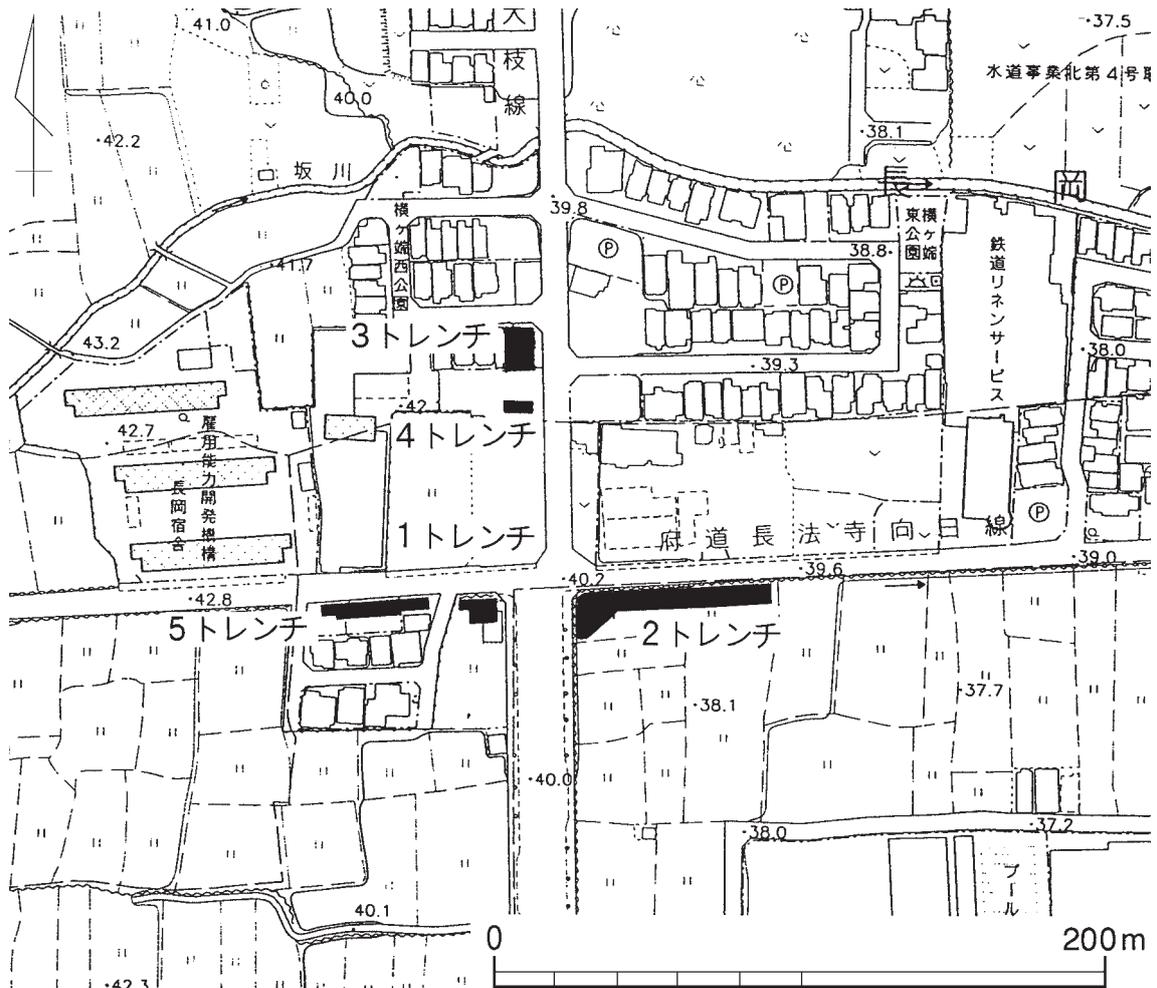
調査地は、長岡京市井ノ内横ヶ端・同市今里5丁目に所在し、西山丘陵裾から東側に延びる標高40m、小畑川右岸の善峰川によって形成された低位段丘上に立地する。

調査範囲は長岡京の条坊推定復元によると長岡京跡右京三条三坊十五町、同三条四坊二町、西三坊大路(新条坊；右京三条三坊十三町・三条四坊四町)にあたり、縄文時代から中世までの複合遺跡である井ノ内遺跡の南端で、一部今里遺跡と重複する地点にあたる。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長森 正、同調査第2課専門調査員竹井治雄が担当した。現地作業・整理作業については調査補助員・整理員、調査全般に関しては京都府教育委員会・長岡京市教育委員会を初め、地元の方々の協力を得た。記して感謝する。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)



第2図 トレンチ配置図

なお、調査に係る経費は全額、京都府建設交通部が負担した。報告に使用した座標系は日本測地系の第6座標系である。

## 2. 周辺地域でのこれまでの調査成果

主要地方道大山崎大枝線に伴う今回の調査地は、長岡京跡右京三条三坊十五町、同三条四坊二町、西三坊大路の推定地で、複合遺跡である井ノ内遺跡の南端に位置し、調査地周辺には芝古墳群、井ノ内稲荷塚古墳、井ノ内車塚古墳が点在する。

周辺地域でのこれまでの調査成果を概観すると、昭和53年の試掘調査(長岡京跡右京第21・27次調査)以降、平成19年度までに十数回にわたり、京都府の府道道路事業として発掘調査がおこなわれている。

右京第772・775次調査は、今回の調査地の北450~670mの位置にあたり、縄文時代晩期の甕棺墓を検出している(網・百瀬2003)。

弥生時代の遺構・遺物としては、右京第27・615次調査で弥生時代後期の溝を確認しており(奥村1980、竹井1999)、今回の調査では第3トレンチで溝S D44、第4トレンチで溝S D04と、弥生時代後期の土器を含む大溝を検出している。これまでの調査では、弥生時代の竪穴式住居跡な

とは検出されていないが、井ノ内遺跡の南端部で弥生集落の存在が想定できる。

古墳時代には、調査地の北東750mに後期の前方後円墳である井ノ内車塚古墳、井ノ内稲荷塚古墳などが存在しており、府道大山崎大枝線の調査でも6世紀後半段階の竪穴式住居跡(右京第830次調査S H77、第615次調査S H01)、竪穴式住居跡と方位を同じくする掘立柱建物跡(右京第830次調査S B210)が存在する(竹井1999、増田2006)。

長岡京造営以前の奈良時代の遺構としては轆の羽口・鉄滓を含む溝(右京第830次調査S D218)を検出している(増田2006)。

長岡京の条坊関係では、右京第772・775次調査において南北方向に直線的にのびる溝2条を検出しており、西三坊大路の西側溝と宅地内の区画溝を想定されている(網・百瀬2003)。今回調査の第1トレンチでもその溝の南延長部で後述のように2条の溝を検出している。この大山崎大枝線が長岡京西三坊大路を踏襲した道と考えた場合、長岡京から平安京へ都が遷り、長岡京の西三坊大路の平安京遷都後の変遷を考える上での有効な遺構・遺物と判断される。

長岡京期～平安時代前期の遺構としては、右京第83次調査Cトレンチで平安時代の遺物包含層を切り込んだ真南北に延びる溝S D2709(全長12.5m、上面幅0.7m、深さ0.26m)がある(山口1982)。また右京第830次調査では、縦板組の大型の井戸(S E02)、鍛冶工房の可能性のある土坑(S K392)などを検出している。

平安時代中期以降の中世段階では、右京第889次調査において白磁・緑釉陶器を含む溝状遺構(S D01・S D02)が、右京第27次調査の溝S D2709とは方位を異にするが、近接した位置に存在する(奥村1980、竹井2007)。

応仁の乱前後に存在した可能性がある「井ノ内館」(文明2(1470)年「井内館令数火」と記載がある)との関連を想像させるような北西から南東方向に延びる瓦器椀を含んだ礫敷きの道路面(右京第830次S D250)を検出している(増田2006)。

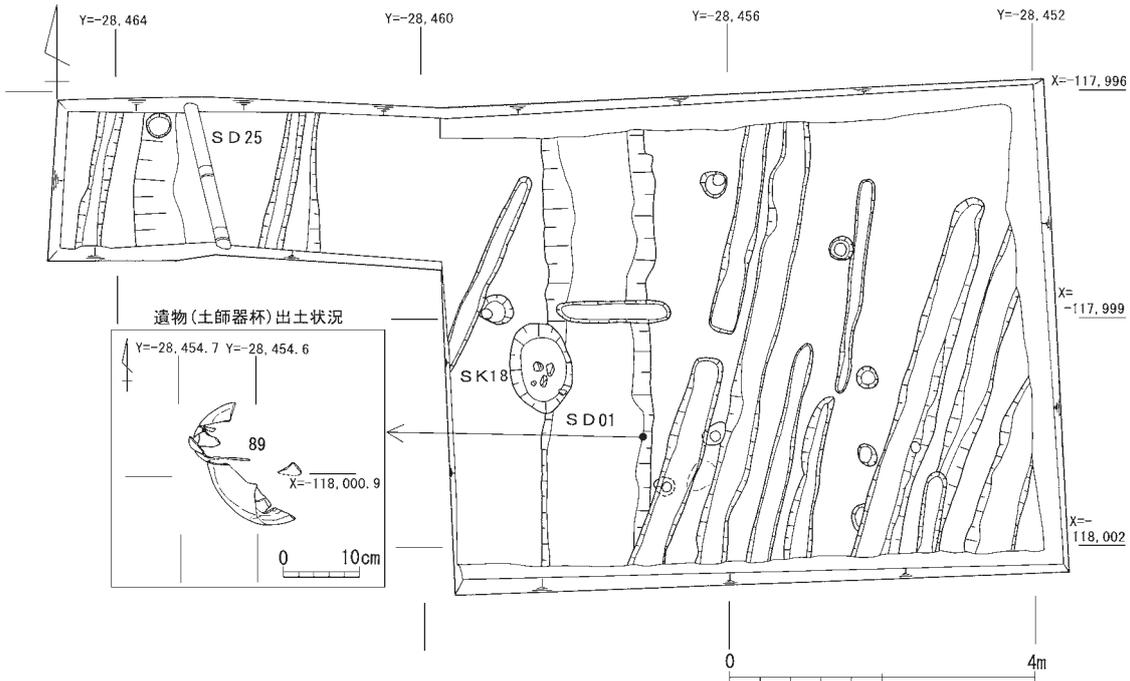
このように、これまでの調査では、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代・長岡京期・平安時代から中世に至る遺構・遺物が集中して出土する地点である。

### 3. 調査の概要

調査区は長岡京市の北西部にあたり、西山丘陵から東側に派生する標高40m前後の低位段丘上に位置する。

南北道路である府道大山崎大枝線と東西道路である府道長法寺向日線(光明寺道)の交差点を挟んで、南西に第1・第5トレンチ、南東に第2トレンチ、北西に第3・第4トレンチを設定して発掘調査を実施した(総調査面積680㎡)。以下トレンチごとにその概要を報告する。

1) 第1トレンチ(第3図、図版第1～3) 調査地の現況は標高38m前後の水田である。調査地は右京第772次調査によってその存在が明らかとなった西三坊大路の西側溝と宅地内の区画溝の南延長線上にあたるため、東西方向に長い5m×10mの調査区を設定した。また、築地および宅地内溝の有無を確認するために、さらに西へ2m×5mと調査区を拡張した。

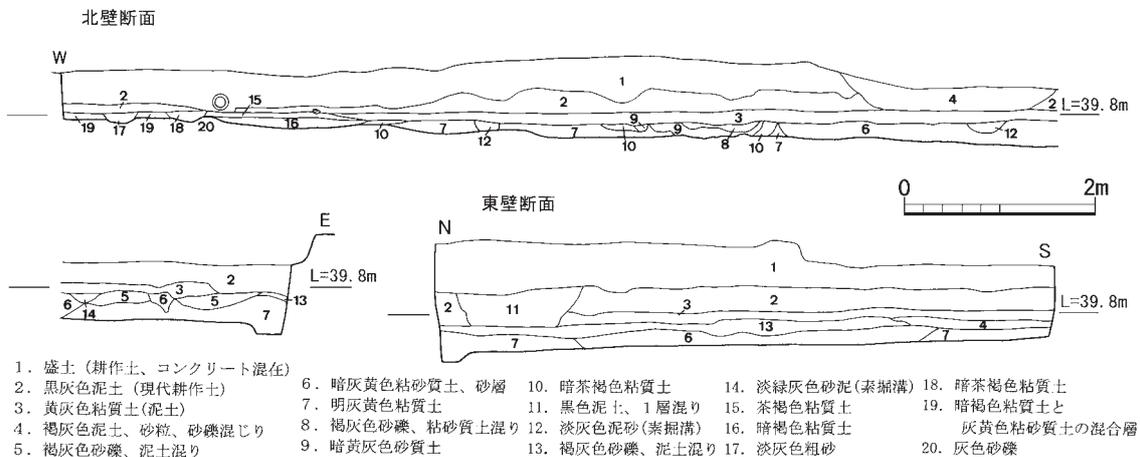


第3図 第1トレンチ遺構図

基本層序は地表下0.5mまで盛土、耕作土、床土が堆積し、褐灰色泥土(砂礫泥土混じり)層は中世の洪水・氾濫層である。この層は厚さ10~20cm、北東から南東方向にかけて堆積する。以下、灰褐色砂礫、明灰黄色土、暗灰黄色粘砂質土で、褐灰色砂礫(泥土混り)は長岡京期の遺構、中世の素掘り溝群の基盤層である。

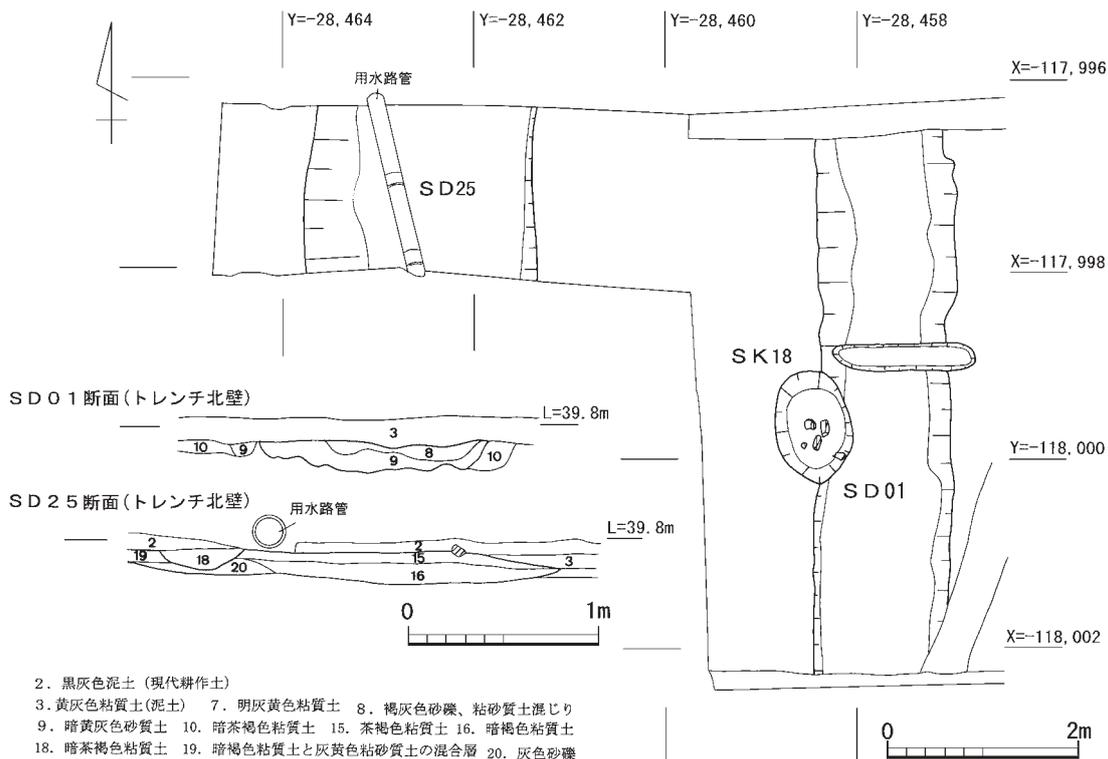
検出した遺構には、地表下0.7mで検出した長岡京跡の西三坊大路の西側溝(溝SD01)、大路の西側に隣接する宅地内の溝状遺構(溝SD25)がある。溝SD01の東側を大路の路面と想定して調査を進めた。路面想定地では北北東から南南西方向の中世素掘り溝が10本と円形を呈する柱穴を多数検出したが、長岡京期の遺構は皆無であった。

溝SD01(図版第1-(3)、第2-(1)・(2)、第3-(3)) 第1トレンチ中央部で検出した真南北方向の溝状遺構である。溝北端の中心座標はX=-17,996.5・Y=-28,457.8で、溝の上面幅1.2m、深



- |                     |                 |                |                 |             |
|---------------------|-----------------|----------------|-----------------|-------------|
| 1. 盛土(耕作土、コンクリート混在) | 6. 暗灰黄色粘砂質土、砂層  | 10. 暗茶褐色粘質土    | 14. 淡緑灰色砂泥(素掘溝) | 18. 暗茶褐色粘質土 |
| 2. 黒灰色泥土(現代耕作土)     | 7. 明灰黄色粘質土      | 11. 黒色泥土、1層混り  | 15. 茶褐色粘質土      | 19. 暗褐色粘質土と |
| 3. 黄灰色粘質土(泥土)       | 8. 褐灰色砂礫、粘砂質土混り | 12. 淡灰色泥砂(素掘溝) | 16. 暗褐色粘質土      | 灰黄色粘砂質土の混合層 |
| 4. 褐灰色泥土、砂粒、砂礫混じり   | 9. 暗灰黄色砂質土      | 13. 褐灰色砂礫、泥土混り | 17. 淡灰色粗砂       | 20. 灰色砂礫    |
| 5. 褐灰色砂礫、泥土混り       |                 |                |                 |             |

第4図 第1トレンチ土層断面図



第5図 第1トレンチ溝S D01・25実測図

さ0.25mを測り、断面皿状を呈する。溝の埋土は上層では暗黄灰色砂質土、部分的に存在する下層では暗茶褐色粘質土が堆積する。最上層では褐灰色砂礫、粘砂質土混じりが堆積し、洪水によって埋没したものと思われる。溝の中央部のX=-117,998.6～X=-118,000.2地点では、溝幅が若干狭くなっており、宅地への橋が架けられた入り口にあたるものと推察される。溝の底には、南から北へ連なる偶蹄動物(牛か)の足跡が、溝の東肩まで残っていた。遺物は少ないが、須恵器細片のほか、長岡京期の土師器皿が東肩部から出土した。

溝S D25(図版第2-(3)、第3-(1)) 溝S D01の西側3.0m、トレンチを拡張した地点で検出した真南北方向の溝状遺構である。この遺構は調査区が南北に狭く、溝状遺構なのか、落ち込み遺構あるいは土坑なのか明確ではないが、現状では溝状遺構と考えている。溝S D25の北端での中心座標はX=-117,996.3・Y=-28,462.6で、溝の上面幅2.2m、深さ0.3mを測り、断面皿状を呈する。溝の埋土は暗茶褐色粘質土で、溝S D01の下層と同様の堆積土である。溝の底面には、溝S D01と同じように、偶蹄動物(牛か)の足跡が見つかった。遺物は破片ではあるが、長岡京期の土師器皿・甕・高杯、須恵器杯・甕等が出土した。

溝S D01と溝S D25は互いに接する側の上縁で計測して約3.0mの間隔で真南北方向に平行しており、長岡京の西三坊大路の西側溝と大路の西側に隣接する宅地内の溝状遺構と想定すると、この2条の溝の間は築地塀、柵の存在が想定される。想定築地の北端での中心座標はX=-117,996.4・Y=-28,459.9で、その周辺では中世の素掘り溝・小柱穴等は検出されたが、築地遺構は確認できなかった。

土坑S K18(図版第3-(2)) 溝S D01を切って検出された土坑である。長軸0.7m、短軸0.5m



第6図 第2トレンチ遺構図

を測り、平面形は楕円形である。土坑断面は椀状を呈し、土坑埋土は上位から暗灰色粘質土、灰色砂質土、淡灰色砂である。最下層の底面付近では小・中礫が混在する。出土遺物は土師器、須恵器、瓦器の破片が出土した。

**素掘り溝群** 第1トレンチ全域で検出した。各溝は上面幅0.2～0.5m、深さ0.1～0.4mを測り、その方向は北北東から南南西(N-8°-E)が大半である。溝の断面は「U」字状を呈し、各溝は異なった埋土で、黒灰色泥土、灰色泥土、淡灰色砂質土(泥土含む)等が堆積する。出土遺物は大半が瓦器椀・皿類である。この素掘り溝群は、溝同士に切り合いがあることから時期差が認められる。平行する溝の間隔は1.1～1.3mであることから、水田の畦畔に伴うものでなく、畑の畝溝と推察される。

**柱穴群** 路面および築地想定位置から検出された。直径0.2～0.4m、深さ0.1～0.2mを測る小ピット群である。土師器、須恵器、瓦器の破片が出土した。柱穴の間隔は散在しており、整然と並ばない。前述の素掘り溝群に伴うものと思われる。

2) 第2トレンチ(第6図、図版第4～11) 調査は土置き場を考慮して、当初は調査区の西端と東端に、それぞれ50㎡と40㎡の小さなトレンチを設定して調査をすすめたが、遺構の密度、広がりを知るために重機掘削と埋め戻し作業を6回繰り返して行ない、最終的には東西5m×南北65mの東西に細長い調査区となった。このため、第2トレンチは、西・中・東区の3区に分けて記述を行う。

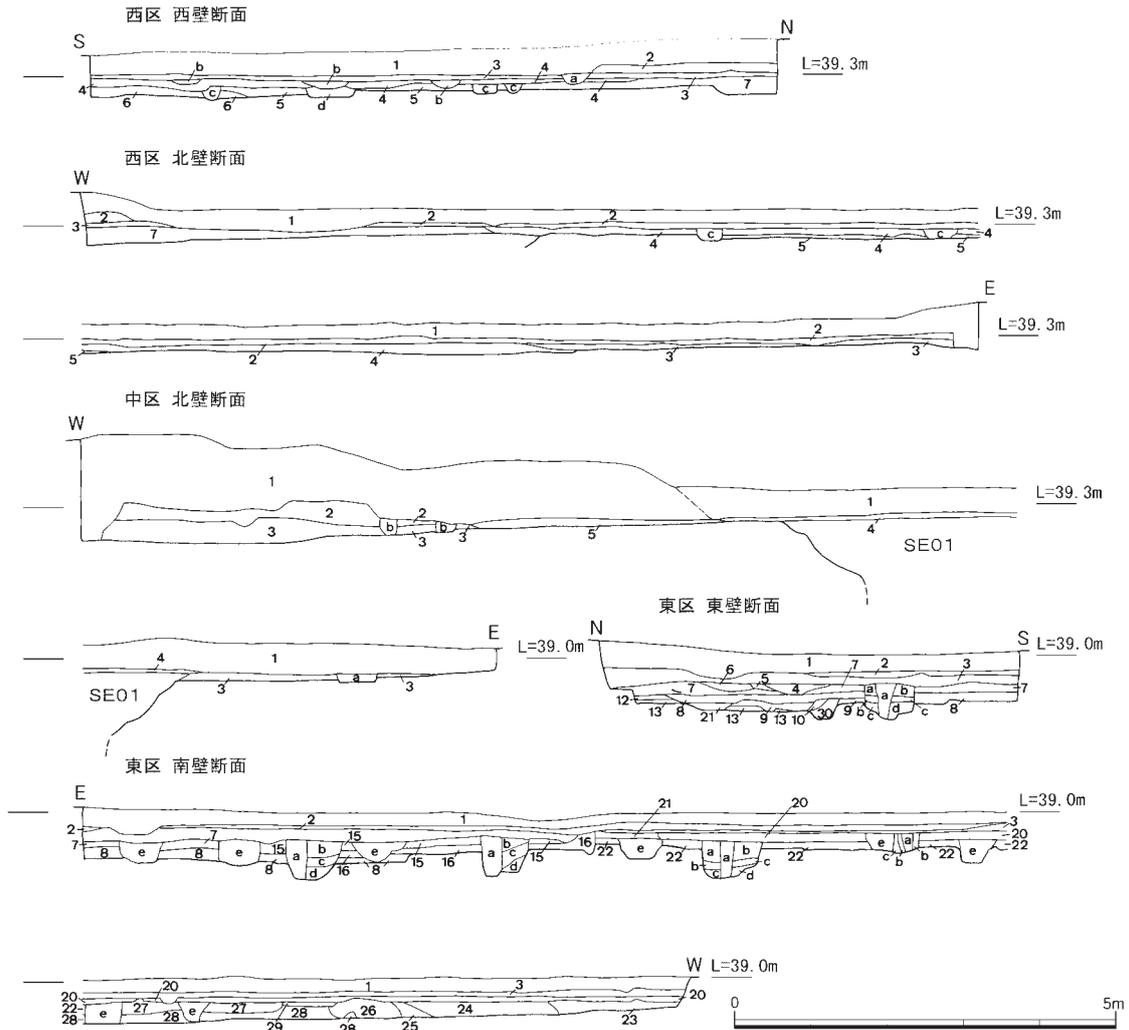
第2トレンチの基本層序は、西区・中区では地表下0.4mまで耕作土(黒灰色泥土)、床土(明橙色粘砂質土)、淡灰黄色粘質土が堆積する。淡褐灰色砂礫・粘質土混じり層は中世の洪水・氾濫層である。この層は、厚さ10～20cmで北東から南東方向にかけて堆積する。東区では、中世層以下、灰褐色粗砂質土(平安時代)、茶褐色粘質土が堆積する。この茶褐色粘質土は奈良時代の基盤層であり、かつ竪穴式住居跡の堆積土である。

検出した遺構は、古墳時代中期～後期の竪穴式住居跡4基、奈良時代の掘立柱建物跡5棟・井戸跡1基を確認したほか、中世の素掘り溝・小柱穴・土坑等を検出した。なお、第1トレンチで検出した西三坊大路に関連した遺構は認められなかった。

竪穴式住居跡は第2トレンチの東半部で集中して4基検出した。それぞれの竪穴式住居跡は遺存状態が悪く、壁面の立ち上がりなどは不明で、わずかに床面をめぐる周壁溝と一部の柱穴、土坑を確認したのみである。

#### (1) 竪穴式住居跡(第8図)

竪穴式住居跡SH12-B(図版第9-(3)、第10・11-(1)・(2)) 第2トレンチの東区で、北東辺と東辺の一部を検出した。竪穴住居跡の規模は、東西4.2m、南北3.7m以上、残存する深さは15cmを測り、方形を呈する。住居の主軸はN-5°-Wである。住居床面には、幅12cm、深さ5cmの周壁溝が巡る。竈は無かった。住居内の埋土は暗茶灰色粘質土で、炭化物・焼土が多く含まれる。その下層では暗茶灰色粘質土と黄褐色土の混合層があり、住居内の埋土と見るよりも、床面を成形するための貼り床と思われる。床面からは、主柱穴を1か所、土坑SK91を検出した。土坑S



2 トレンチ西区 北・西壁断面図

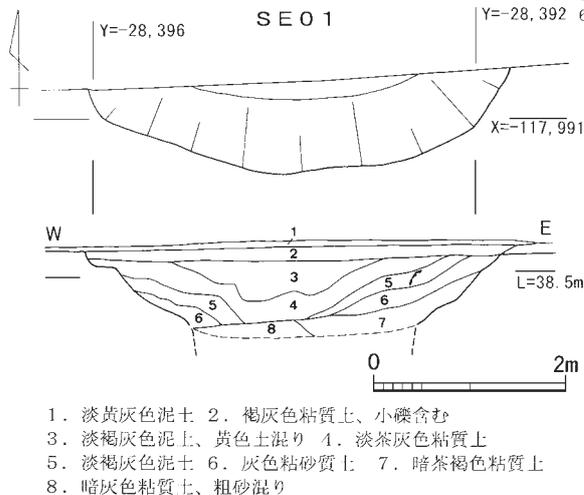
- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 1. 暗黒灰色泥土        | 7. 淡灰色砂礫、褐色粘質土混り  |
| 2. 黒灰色泥土         | a. 素掘り溝(1・3層の混合層) |
| 3. 明褐色粘砂質土       | b. 素掘り溝(4・5層の混合層) |
| 4. 淡褐色粘粗砂質土、泥土混り | c. 暗褐色粘質土         |
| 5. 淡灰黄色粘質土、砂質土混り | d. 褐色粘質土、砂礫混      |
| 6. 褐色粘砂質土        |                   |

2 トレンチ中区 北壁断面図

- |             |               |
|-------------|---------------|
| 1. 盛土、黒灰色泥土 | 5. 淡灰黄色粘質土    |
| 2. 黒灰色泥土    | 6. 褐色粘質土      |
| 3. 明褐色粘砂質土  | a. 暗褐色粘質土(柱穴) |
| 4. 淡褐色粘粗砂質土 | b. 素掘り溝       |

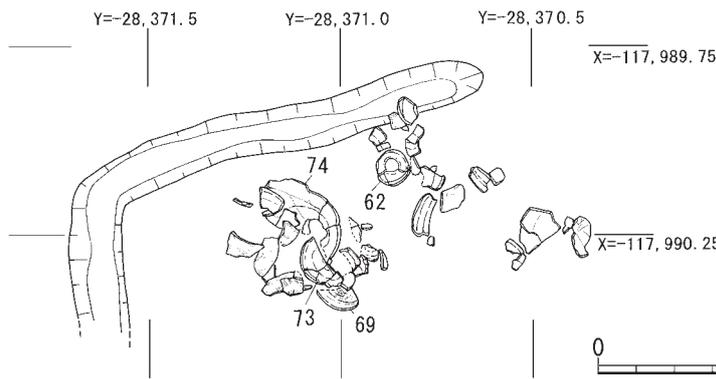
2 トレンチ東区 南・東壁断面図

- |                           |                       |                   |
|---------------------------|-----------------------|-------------------|
| 1. 黒灰色泥土(現代耕作土)           | 2. 黄灰色泥砂(床土)          | 3. 褐色粘土           |
| 4. 茶灰色粘質土                 | 5. 淡褐色粘土              | 6. 淡褐色粘砂質土        |
| 7. 淡暗茶灰色粘質土               | 8. 暗茶褐色粘砂質土           | 9. 11・14層の混合層     |
| 10. 暗褐色土と黄褐色土の混合層(暗褐色土、強) | 11. 暗褐色粘質土            | 12. 暗茶褐色粘質土       |
| 13. 暗茶褐色粘砂質土              | 14. 黄褐色粘質土            | 15. 暗茶褐色粘砂質土      |
| 16. 暗茶灰色粘砂質土、炭化物、焼土含む     | 17. 暗茶灰色粘質土           | 18. 暗茶褐色粘性土       |
| 19. 黄褐色粘性土                | 20. 灰褐色粘砂質土           | 21. 灰褐色粘質土        |
| 22. 茶褐色粘質土、炭化物焼土混         | 23. 暗褐色粘質土            | 24. 暗赤褐色粘質土       |
| 25. 暗赤褐色粘質土小礫、含           | 26. 淡黄灰色砂礫            | 27. 茶褐色粘質土        |
| 28. 暗茶褐色粘質土               | 29. 淡黄灰色砂と暗茶褐色粘質土の混合層 | 30. 茶灰色砂質土        |
| a. 暗茶褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合層     | b. a層と同じ(黄褐色土多い)      | c. a層と同じ(暗茶褐色土多い) |
| d. C層と同じ(粘性土多い)           | e. 暗褐色粘質土、黄褐色土、含(柱穴)  |                   |

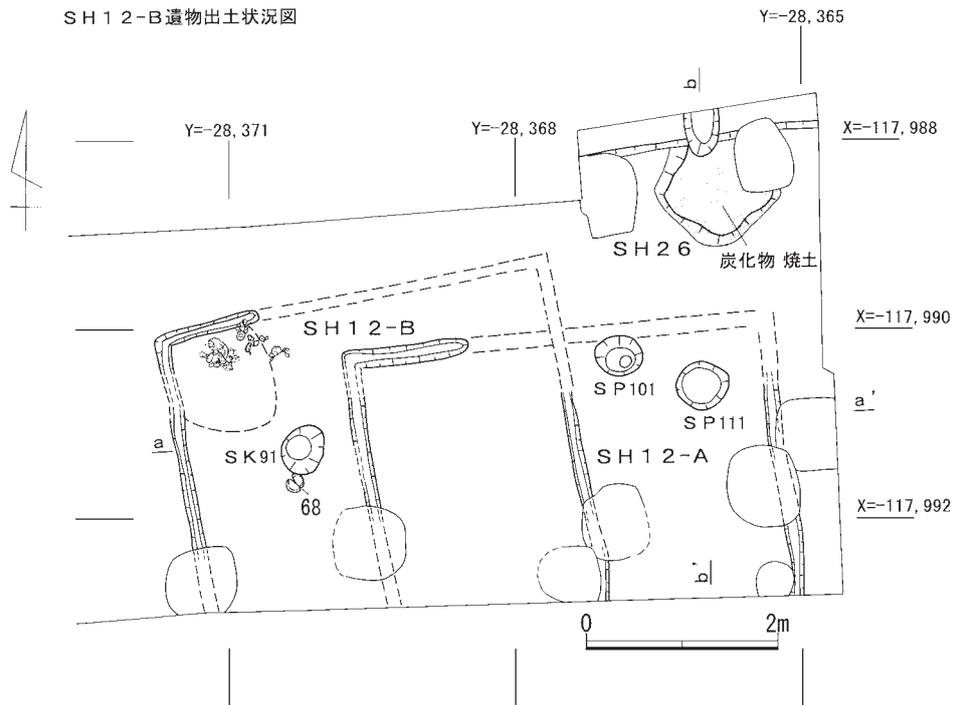


- |                 |                |
|-----------------|----------------|
| 1. 淡黄灰色泥土       | 2. 褐色粘質土、小礫含む  |
| 3. 淡褐色粘質土、黄色土混り | 4. 淡茶灰色粘質土     |
| 5. 淡褐色粘土        | 6. 灰粘砂質土       |
| 7. 暗茶褐色粘質土      | 8. 暗褐色粘質土、粗砂混り |

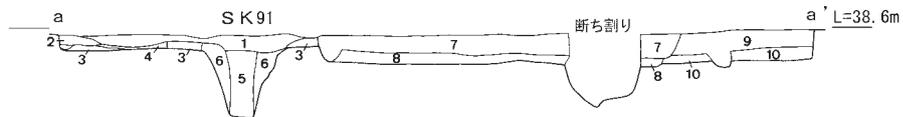
第7図 第2トレンチ土層断面図・井戸跡SE01実測図



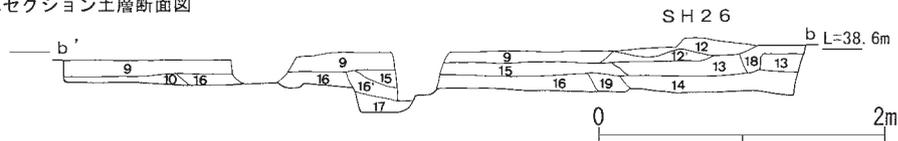
SH12-B遺物出土状況図



SH12-A・B東西セクション土層断面図



SH26南北セクション土層断面図

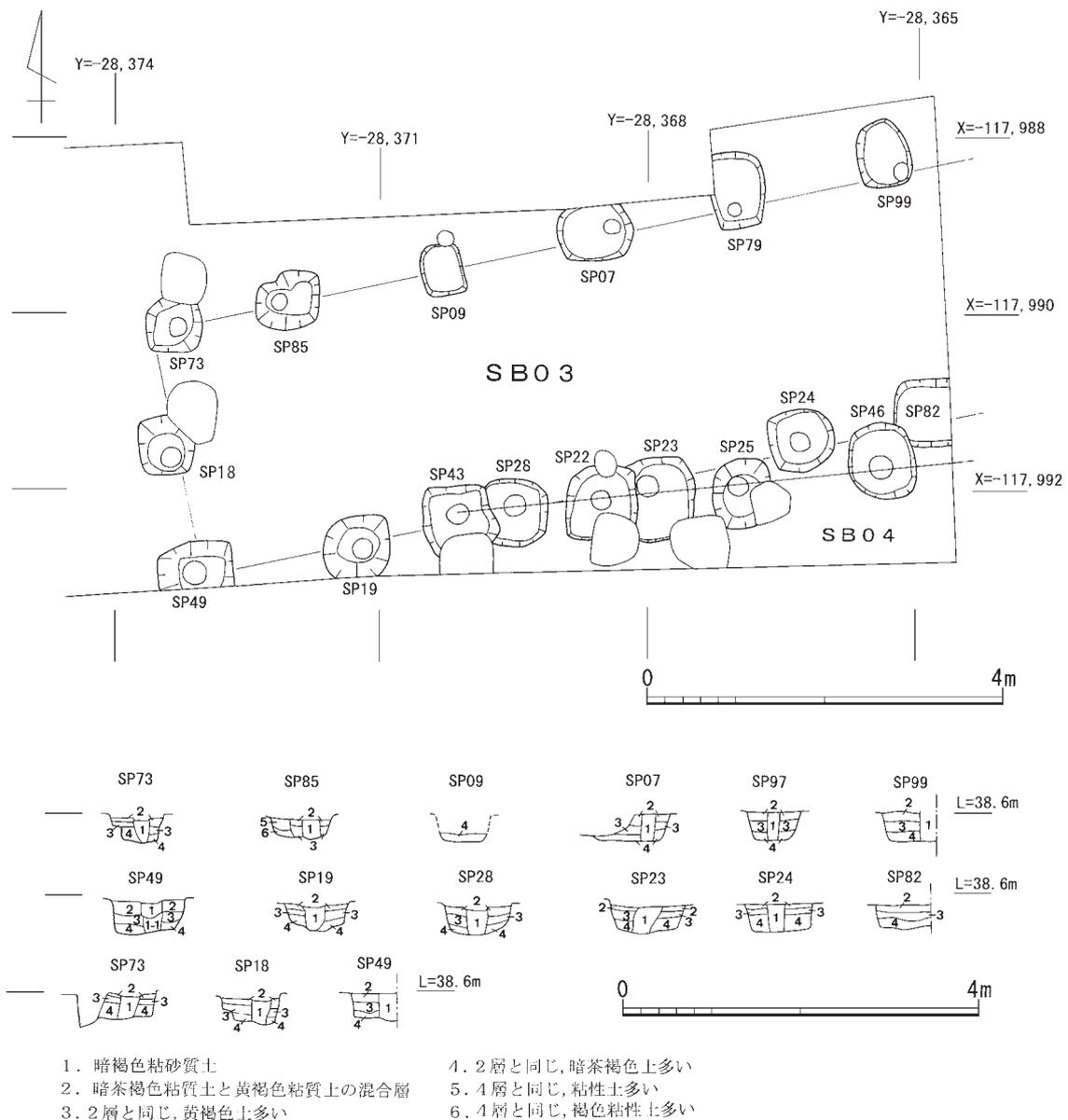


1. 暗茶灰色粘砂質土、炭化物、焼土多く含む
2. 暗茶灰色粘砂質土、砂粒含む
3. 淡暗褐色粘砂質土
4. 暗灰色粘質土
5. 暗茶褐色粘質土
6. 暗茶褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合層
7. 暗茶灰色粘質土
8. 黄褐色土と暗茶灰色粘質土の混合層
9. 淡暗茶灰色粘質土
10. 暗茶褐色粘質土、黄褐色粘質土の斑点状混り
11. 黄褐色(灰)粘質土
12. 黄褐色粘質土、焼土、炭化物含む
- 12' 炭化物多い
13. 暗茶褐色粘質土、焼土、炭化物含む
- 13' 暗茶褐色粘質土
14. 暗茶褐色粘砂質土
15. 茶灰色粘砂質土
16. 暗茶褐色粘質土と黄褐色粘質土、灰色粘性土の混合層
17. 暗褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合層
18. 淡灰色粘砂質土、炭化物、焼土含む
19. 黄褐色粘性土
20. 淡暗灰色粘質土
- a. 暗茶褐色粘質土
- b. 暗茶褐色粘性土
- c. 暗茶褐色粘砂質土

第8図 第2トレンチ縦穴式住居跡SH12-A・SH12-B・SH26実測図

K91は調査時には土坑と判断したが、最終的に支柱穴と判断した。直径0.4m、深さ0.5m、柱痕径20cmを測る。支柱穴の抜き取り穴から須恵器無蓋高杯(第21図68)が出土した(図版第11-(3))。住居床面の北西隅から須恵器類がほとんどで、杯身・蓋・高杯・甕等が密集して出土しており、住居の廃棄時に寄せ集められたものと推察される。貯蔵穴は検出されなかった。

竪穴式住居跡SH12-A(第8図) 第2トレンチの東区で竪穴式住居跡SH12-Bの下層で検出した竪穴式住居跡で、北東辺と東辺の一部を検出した。方形の住居で、東西4.2m、南北3.7m以上を測り、遺構検出面から床面までの残存する深さは15cmである。竪穴式住居跡の主軸はN-2°-Wである。住居床面には幅10cm、深さ5cmの周壁溝がめぐる。住居内の堆積土は、上層では暗茶灰色粘砂質土、焼土、炭化物を含む、下層では暗茶灰色粘砂質土、淡暗褐色灰色粘砂質土、暗灰色粘質土の混合層である。床面を切り込んで長岡京期以降の柱穴・土坑等があり、竪穴式住居跡



第9図 第2トレンチ掘立柱建物跡S B03・04実測図

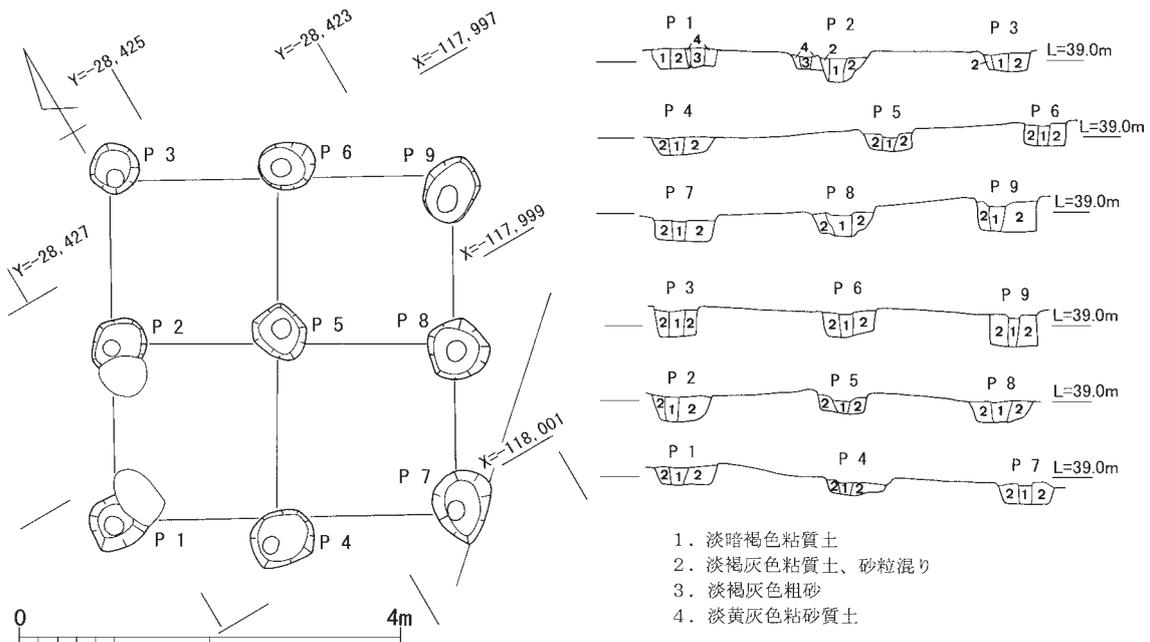
S H12-Aに関連する柱穴の可能性のあるものとして、柱穴S P111がある。柱穴S P111の規模は、直径0.5m、深さ0.5m、柱痕径20cmを測る。この柱穴は住居の北東隅に近すぎる位置にあり、主柱穴とする確証を得ない。

竪穴式住居跡S H26(図版第9-(2)・(3)) 第2トレンチの東区東端で、竪穴式住居跡の北辺の一部を検出したもので、方形の竪穴式住居跡と思われる遺構である。北辺の掘り込み(検出長約6.5m)を検出したが、南・東・西辺は奈良時代以降の柱穴・土坑などにより削平を受け、遺存していない。住居の検出面から床面までの深さは10cmを測る。住居の主軸はN-5°-Wである。住居床面には周壁溝がなかった。住居の北辺部には焼土・炭化物・黄褐色粘土が混在して広がる。また、竪穴式住居跡S H26の北辺推定中央には焼け土を含む高まりを検出したが、竈の本体は確認していない。住居内の埋土は黄灰色粘砂質土で、炭化物・焼土が多く含まれる。床面を切り込んで長岡京期以降の柱穴・土坑があり、竪穴式住居跡S H26に関係するものとしては、柱穴S P101がある。柱穴S P101は、直径0.35m、深さ0.5m、柱痕径18cmを測る。住居内の床面から土師器・須恵器が出土した。

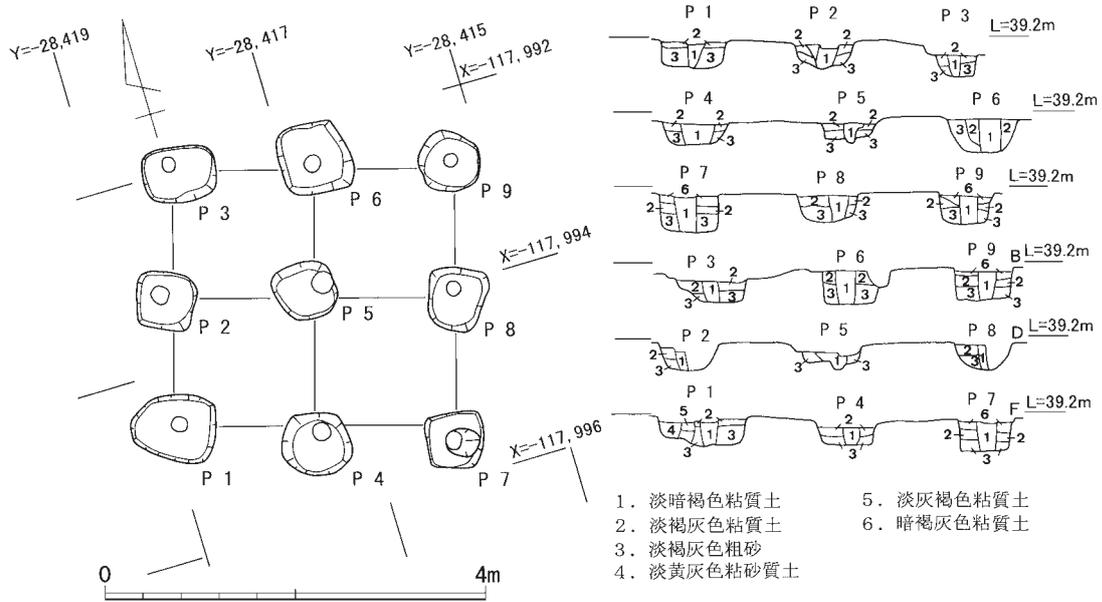
竪穴式住居跡S H29(第6図) トレンチの東区西端で検出した方形の竪穴式住居跡で、北東辺と南東辺の一部を検出した。竪穴式住居跡の規模は、北東辺で4.2m以上、南東辺で3.7m以上を測り、検出面から床面までの深さは5cmを測る。住居の主軸はN-40°-Eである。住居床面には周壁溝が見られない。住居内の埋土は、暗褐色粘質土、暗赤褐色粘質土が堆積し、部分的に、炭化物・焼土が混在する。住居内から須恵器・土師器の細片が出土した。

(2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、第2トレンチではトレンチ中央では明確に建物跡として柱列が並ぶものはないが、西端で総柱の建物跡2棟、東端で3棟(総柱1棟、東西棟の建物2棟)を検出した。建物跡



第10図 第2トレンチ掘立柱建物跡S B05実測図

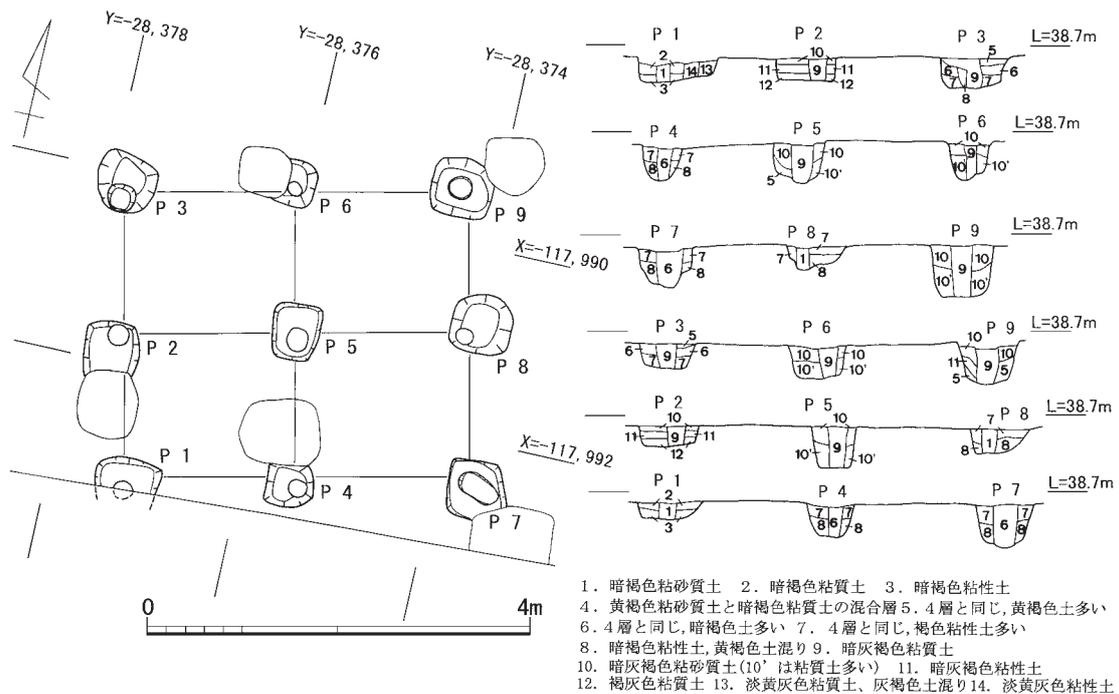


第11図 第2トレンチ掘立柱建物跡S B06実測図

としてまとまるピット群のほかにも多くの柱穴を検出しているが、現地調査時および調査後にも検討を加えたが、建物跡としてまとまらないものが数多くある。

掘立柱建物跡S B03(第9図、図版第7-(2)・(3)、第8-(1)) トレンチ東区東半部で検出した。南北2間(総長2.7m)、東西5間(総長9.0m)以上の東西棟である。柱筋の軸軸はN-12°-Wである。柱間寸法は梁行1.35m等間(4.5尺)、桁行1.65m(5.5尺)を測る。柱掘形は方形を呈し、一辺0.5~0.8m、深さ0.5m、柱痕径20cmを測る。

掘立柱建物跡S B04(第9図、図版第7-(2)・(3)) トレンチ東区東半部で掘立柱建物跡S B



第12図 第2トレンチ掘立柱建物跡S B07実測図

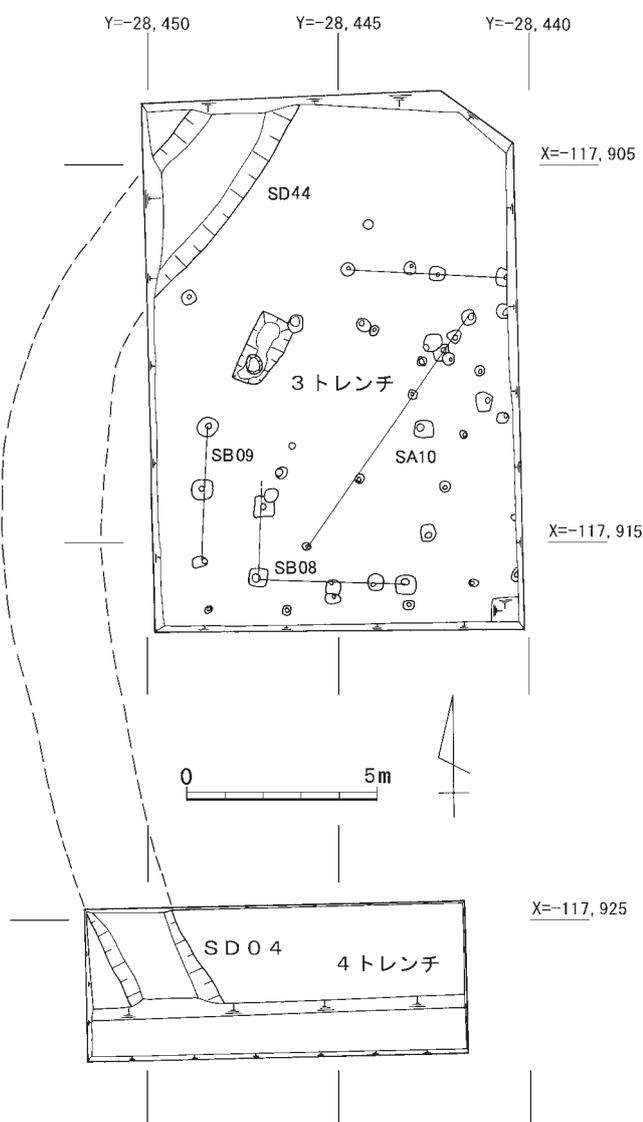
03の上層で検出した。東西3間(総長4.9m)以上で、東西棟か南北棟か不明である。柱筋の主軸はN-25°-Wである。柱間寸法は1.65m等間(5.5尺)を測る。柱掘形は方形を呈し、一辺0.7~0.9m、深さ0.5m、柱痕径20cmを測る。柵列の可能性もある。

**掘立柱建物跡SB05**(第10図、図版第4-(3)) トレンチ西端で検出した2間(総長3.6m)×2間(総長3.6m)の総柱建物である。柱筋は真北方向から大きく東(N-40°-E)に振れる。棟筋はP4・P6の柱痕が側柱筋から0.3m外側に出ていることから、南北棟の建物と考える。柱間寸法は桁行1.8m(6尺)、梁行1.8m(6尺)を測る。柱掘形は方形を呈し、一辺0.35~0.55m、深さ0.15~0.35mを測る。柱痕は円形を呈し、0.15~0.18mである。遺物は土師器の細片が出土した。

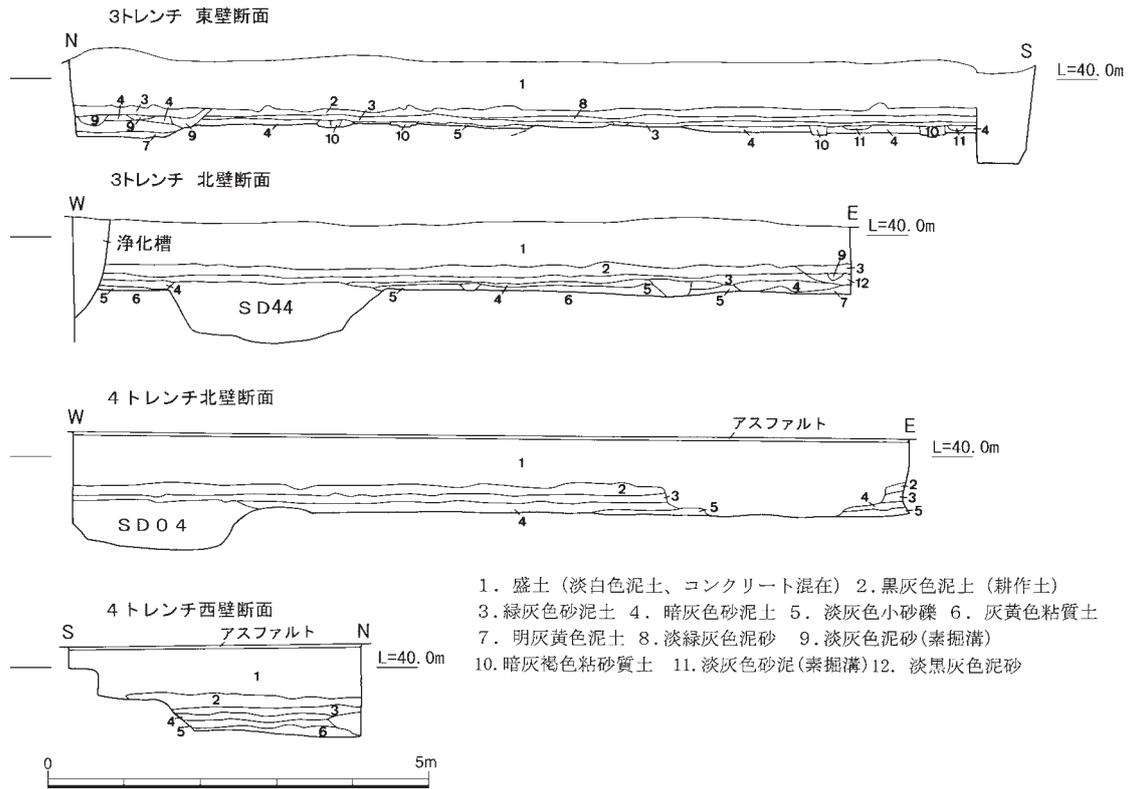
**掘立柱建物跡SB06**(第11図、図版第5-(2)・(3)) 掘立柱建物跡SB05の北東4mの地点で検出した2間(総長3.0m)×2間(総長2.7m)の総柱建物である。柱筋は真北方向から大きく東(N-30°-E)に振れる。棟筋はP2・P8の柱痕が側柱筋から若干外側に出ていることから、東西棟の建物と考える。柱間寸法は、桁行1.5m(5尺)、梁行1.35m(4.5尺)を測る。柱穴は方形を呈し、一辺0.35~0.55m、深さ0.15~0.35mを測る。柱痕は円形を呈し、0.15~0.18mである。遺物は土師器の細片が出土した。

**掘立柱建物跡SB07**(第12図) 調査区東部、掘立柱建物跡SB04の西側から出土した2間(総長3.6m)×2間(総長3.0m)の総柱建物である。柱筋は真北方向から西(N-12°-W)に振れる。棟筋はP2・P8の柱掘形が側柱筋から外側に出ていることから、東西棟の建物と考える。柱間寸法は桁行1.8m(6尺)、梁行1.5m(5尺)を測る。柱穴は方形を呈し、一辺0.35~0.55m、深さ0.15~0.35mを測る。柱痕は円形を呈し、0.15~0.18mである。遺物は土師器の細片が出土した。

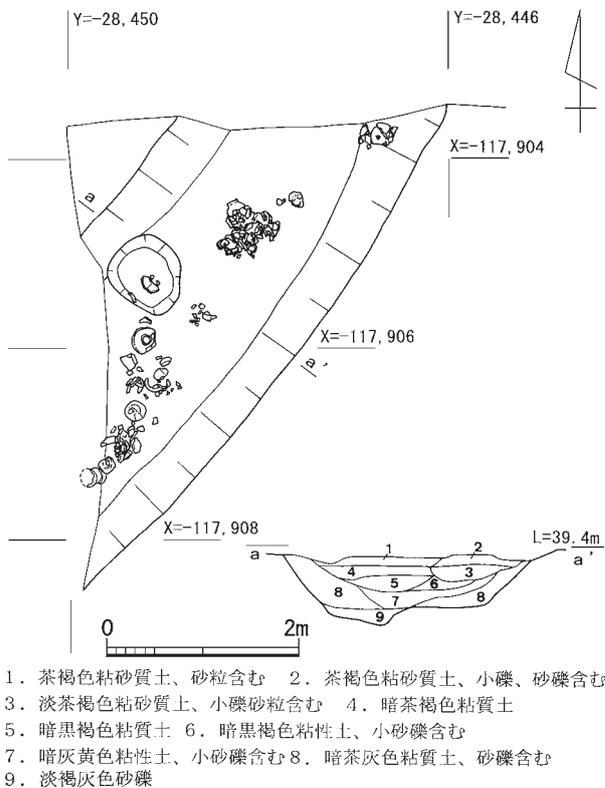
**井戸跡SE01**(第7図、図版第6-(2)・(3)) 第2トレンチ中区北側で掘形の一部を検出した素掘りの井戸で、その全容は明らかではない。井戸の平面は円形を呈し、直径4m以上、深さ1.3m以上を測る。断面は播鉢状を呈し、井戸内の堆積



第13図 第3・4トレンチ遺構図



第14図 第3・4トレンチ土層断面図



第15図 第3トレンチ溝SD44実測図

土は泥土・粘質土・砂質土等の互層で人為的に埋められたものと思われる。須恵器、土師器等の細片が各層から出土した。

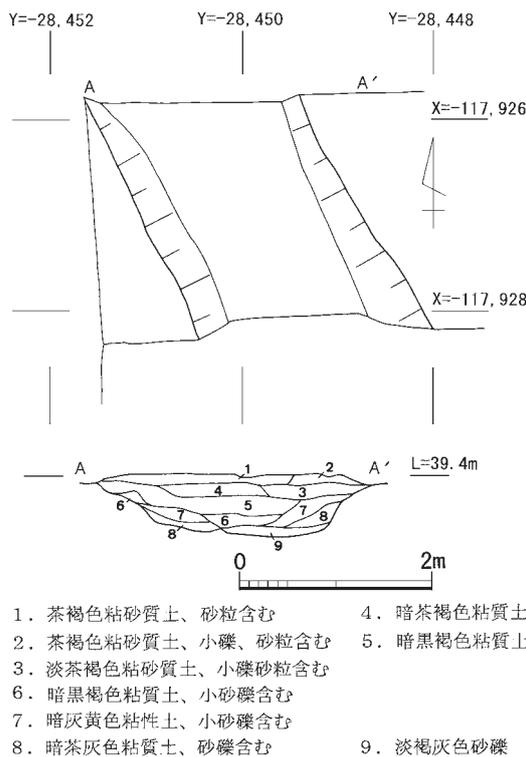
3) 第3トレンチ(第13図、図版第12～15-(2)) 排土置き場を考慮して、トレンチを調査区の南側(100㎡)と北側(34㎡)の2か所に分けて調査を実施し、最終東西10m、南北14mのトレンチとなった。

第3トレンチの基本層序は、地表下0.9mまで、コンクリートを含む盛土・耕作土・床土が堆積する。以下、淡灰色小砂礫(泥土混じり)は中世の洪水・氾濫層である。この層は厚さ10～20cm、北西から南東方向にかけて堆積する。灰黄色粘質土は柱穴群、溝SD44の基盤層である。

調査の結果、奈良時代の掘立柱建物跡と弥生時代後期の溝SD44を確認した。

溝SD44(第15図、図版第12-(3)～15-

(2) 第3トレンチの北西隅で検出した北東から南西方向(N-30°-E)の溝である。溝の上面幅2.4m、深さ1.0mを測り、断面は逆台形状を呈する。溝底は幅1.2mの平坦面が認められる。溝の埋土は、上層が茶褐色粘質土(砂粒含む)、茶褐色粘砂質土、中層は淡茶褐色粘砂質土、暗茶褐色粘質土、暗黒褐色粘質土、暗黒褐色粘性土である。下層は、暗灰黄色粘性土、暗茶灰色粘質土に砂礫が含まれる。最下層は淡褐灰色砂礫である。上層は砂礫・小砂礫が混在し、人為的に埋められた土壌である。土師器・須恵器が混じっている。中層では残存率の高い弥生土器の破片が多く出土した。下層には炭化物・焼土・腐植土・泥土が見られ、弥生土器の甕・壺・高杯・椀などが多数出土し、完存したのものも出土している。時期は弥生時代後期後葉と推定される。



第16図 第4トレンチ溝 S D04実測図

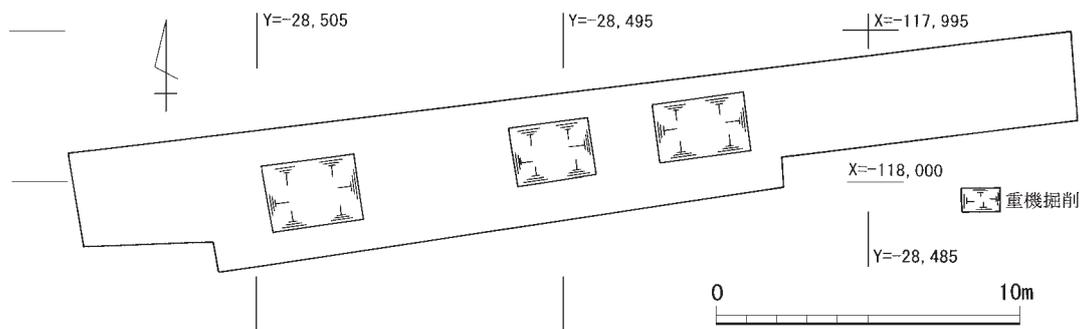
掘立柱建物跡 S B08(第13図) 柱掘形は一辺0.3~0.4m、深さ0.1~0.2mの方形を呈する柱穴と、直径0.2m前後、深さ0.2mの円形柱穴がある。方形の柱穴の柱間寸法は2m前後を測るが、建物跡として復原が困難である。

掘立柱建物跡 S B09(第13図) 柱筋が真北から僅かに振れる南北方向の掘立柱建物である。

柵列 S A10(第13図) 円形柱穴の柱間寸法は2.5~2.7mを測り、柵と思われる。時期については、平安時代~中世である。

4) 第4トレンチ(第13図、図版第16) 調査地はアスファルトが敷設されていたため、カッターで切断し、4×10mの東西に長い調査区を設定した。このトレンチでは北西から南東方向の溝 S D04を検出した。

溝 S D04(第16図、図版第16-(2)・(3)) トレンチの西端部で検出した北西から南東方向(N-25°-W)の溝である。溝の上面幅2.1m、深さ0.9mを測り、断面は逆台形状を呈する。溝の埋



第17図 第5トレンチ配置図

土は上層(茶褐色粘質土・粘砂質土)、中層(暗茶褐色粘質土)、下層(黒褐色粘質土、小砂礫、粗砂混り)、最下層(暗茶灰色粘質土)が堆積する。上層は小砂礫・砂、土師器・須恵器等が混在し、固くしまっており、人為的に埋められた土壌である。中層および下層から弥生土器の破片が出土した。溝SD04は溝SD44と規模・形態・土壌堆積・遺物出土状況等が類似しており、一連の遺構で、弥生時代後期の湾曲する溝と思われる。

5) 第5トレンチ(第17図、図版第15-(3)) 第5トレンチは、排土置き場と調査地南側の民家を考慮して、幅2～4m、東西33mの調査区を設定した。総面積118㎡である。調査当初、重機を用いて調査区全体を0.5mの深さで掘削した。続いて、トレンチ内に3か所のグリッドを設定し、表土下2.2mまでさらに掘り下げた。その結果、暗灰色泥土混じりのアスファルト、コンクリート等が堆積していた。このように第5トレンチは後世の削平が著しく、長岡京期あるいは中世の遺構・遺物は検出できなかった。今回の調査地内の埋め土の状況から、30数年前まで農業用水の溜池がこの地点に存在したと思われる。(竹井治雄)

#### 4. 出土遺物

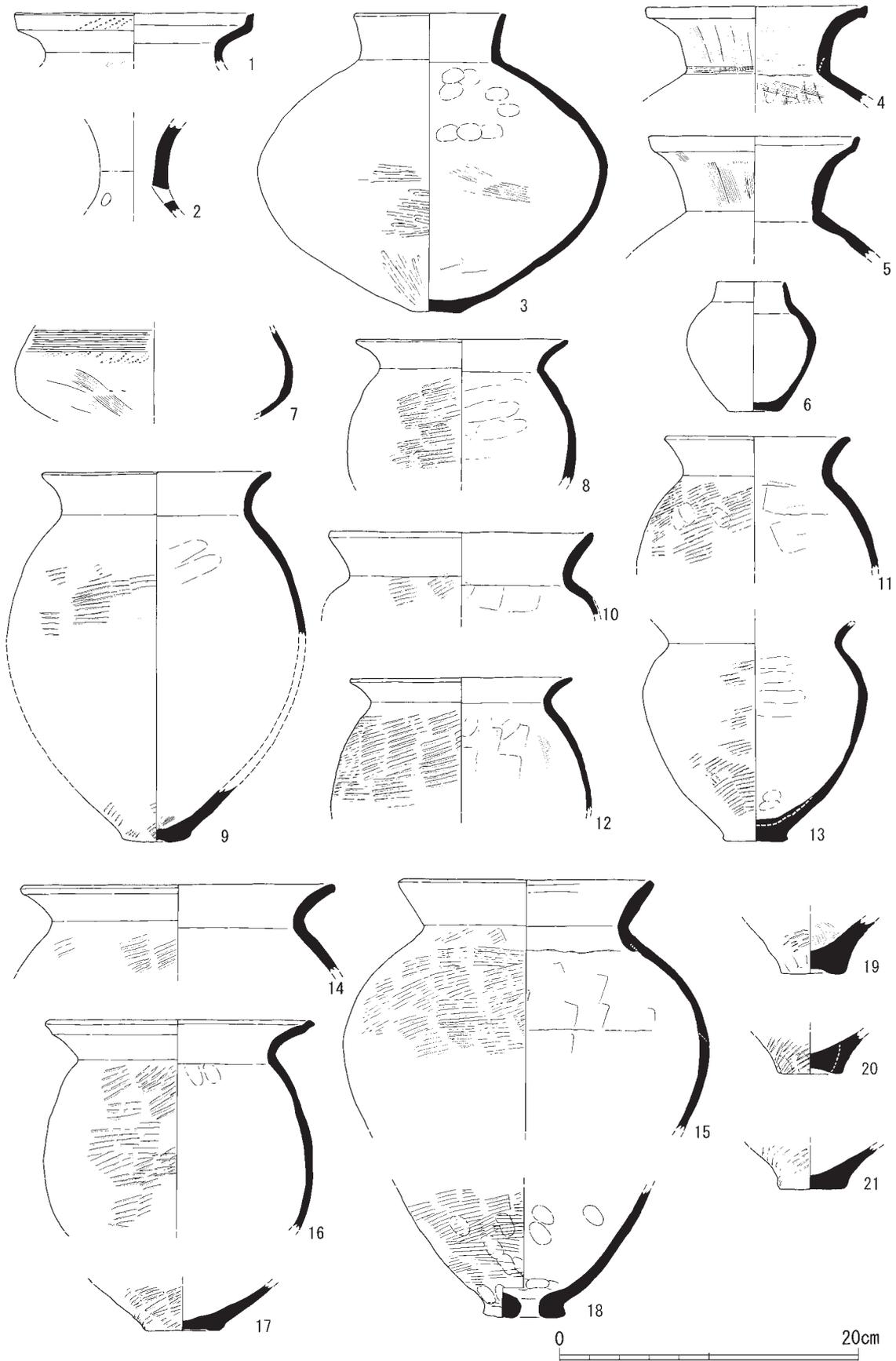
##### 1) 弥生時代の遺物(第18～20図、図版第17・18)

今回の調査で出土した弥生土器は、コンテナ数にして約10箱を数える。遺構に伴う弥生土器は、そのほとんどが第3トレンチ溝SD44から出土し、この溝の延長部の可能性が高い第4トレンチ溝SD04から若干の弥生土器が出土した。

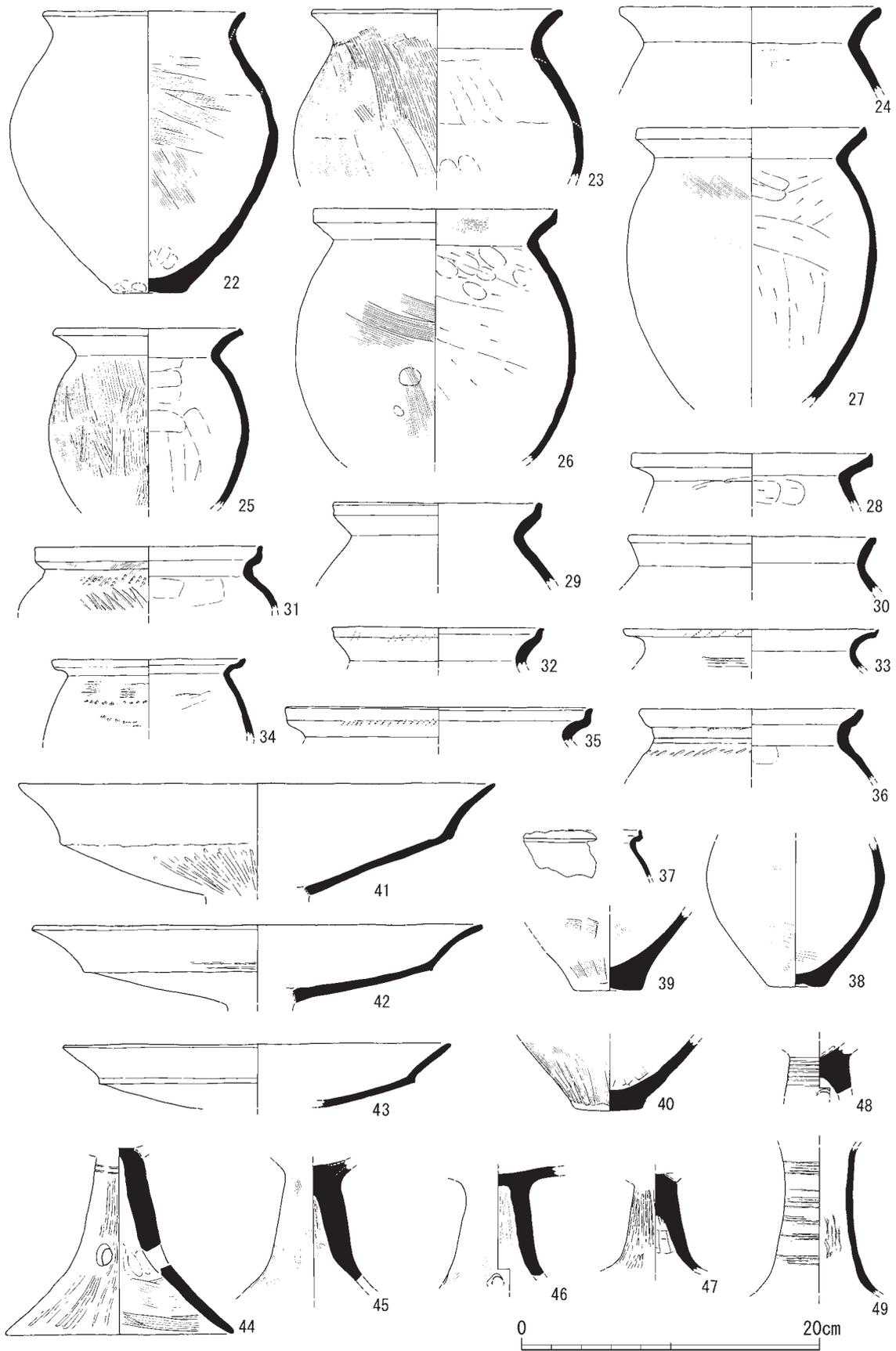
第18図1・2は、第4トレンチ溝SD04から出土した。1は、受口状口縁をなすいわゆる近江系の甕である。受部の引き出しは大きく、口縁部外面に櫛描列点文を施す。色調はにぶい黄褐色を呈し、復元口径は16.0cmを測る。2は、器台の胴部である。胴部径は小さく、三方に円形透かしをもつ。第4トレンチ溝SD04から出土した土器の時期は、受口状口縁甕は口縁部の引き出しが大きいことから後期中葉～後葉の幅で捉えられる資料であるが、器台は小片ながら、胴部径が小さく引き締まり、締まりが強いことから、弥生時代後期後葉に位置づけられるものである。相伴資料には、小形化した第5様式タタキ成形甕の底部小片が認められるが、こうした点もおおよそ後期後葉とする年代観と矛盾しない。

3～61は、第3トレンチ溝SD44から出土した。遺物は、最上層から弥生土器のほかに土師器・須恵器等が出土しているが、下位の層位では弥生時代後期のまとまった土器が出土し、古墳時代以降の遺構からの混入はみられない。溝埋土は5～6層に分層され、遺物の多くは下層とされる黒褐色粘質土層から出土しているが、最上層および上層出土土器と下層出土土器に大きな時期差は認められない。出土土器はほぼ完形個体として復元できるものが5%前後含まれ、個体の2分の1以上を復元できるものが3割程度を占める。

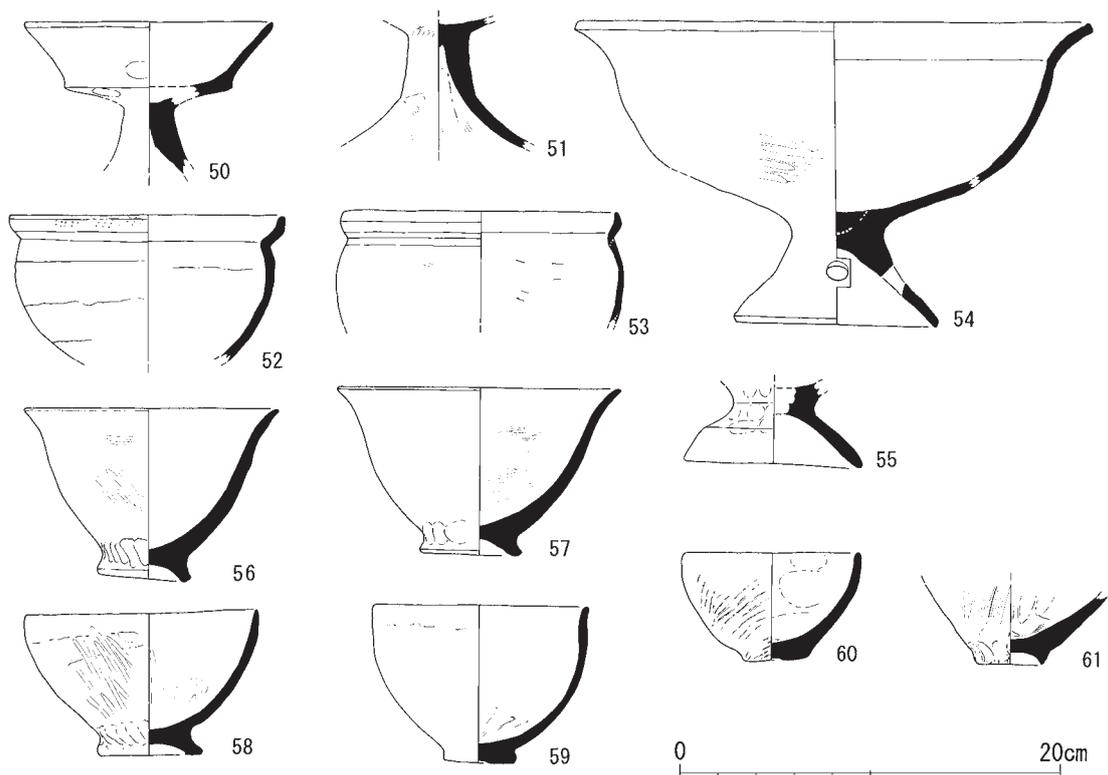
第18図3～7は、壺である。3は短頸壺で、4・5は広口壺である。4は、大きく外反する口縁部をもち、端部に面をなす。5は、受口状口縁を呈し、近江系土器の影響を受けたものとみられる。7の壺体部は、櫛描直線文と同列点文をもつ近江系の文様構成をなす壺の一部である。



第18図 出土遺物実測図(1)



第19図 出土遺物実測図(2)



第20図 出土遺物実測図(3)

第18図8～15は、いわゆる第5様式系のタタキ成形による「く」字口縁の甕である。口縁は外反し、端部を丸く収める。内面は摩耗が著しいが、いずれもハケを施し、ナデ調整で仕上げている。特に内面上半部は丁寧にナデ消されている。法量はおおよそ2群に分かれ、9・10・12・15など残存高および口径から器高25cm前後と推定される中形品と、8・13など器高15cm前後と推定される小形品がみとめられる。8は口径13.8cm、9は14.8cm、10は17.4cm、12は14.7cm、15は16.4cmを測る。14は細片であるが、復元口径20.6cmとやや大きく、大形品の可能性がある。16は、口縁端部が受口状をなす甕である。体部外面はタタキ成形により、第5様式系甕との折衷的な要素をもつ。17～21は、甕の底部である。くぼみ底を呈する第5様式系甕の底部(17・19・20)と平底(21)をなすものがある。また、18は底部中央を穿孔していることから甕の底部とみられる。

第19図22～29は、外面ハケ調整を基調とする「く」字口縁甕である。口縁端部を丸く収める単純口縁をなすもの(22～24)と、端部に面をなすもの(25～29)がある。後者には、いわゆる跳ね上げ状口縁を呈するもの(25)や、端部内面に強いナデを施し受口状にわずかに立ち上げるもの(29)がある。単純口縁をなす甕(22・23)は、頸部の屈曲が緩やかであり、内面はハケ調整を主とするが、一方、口縁端部に面をなす甕(26・27・28)は頸部の屈曲がシャープで内面ケズリ調整を主とし、系統的な違いが認められる。39・40は、外面に縦ハケを施し、内面にもハケ調整を施す「く」字口縁甕の底部とみられる。

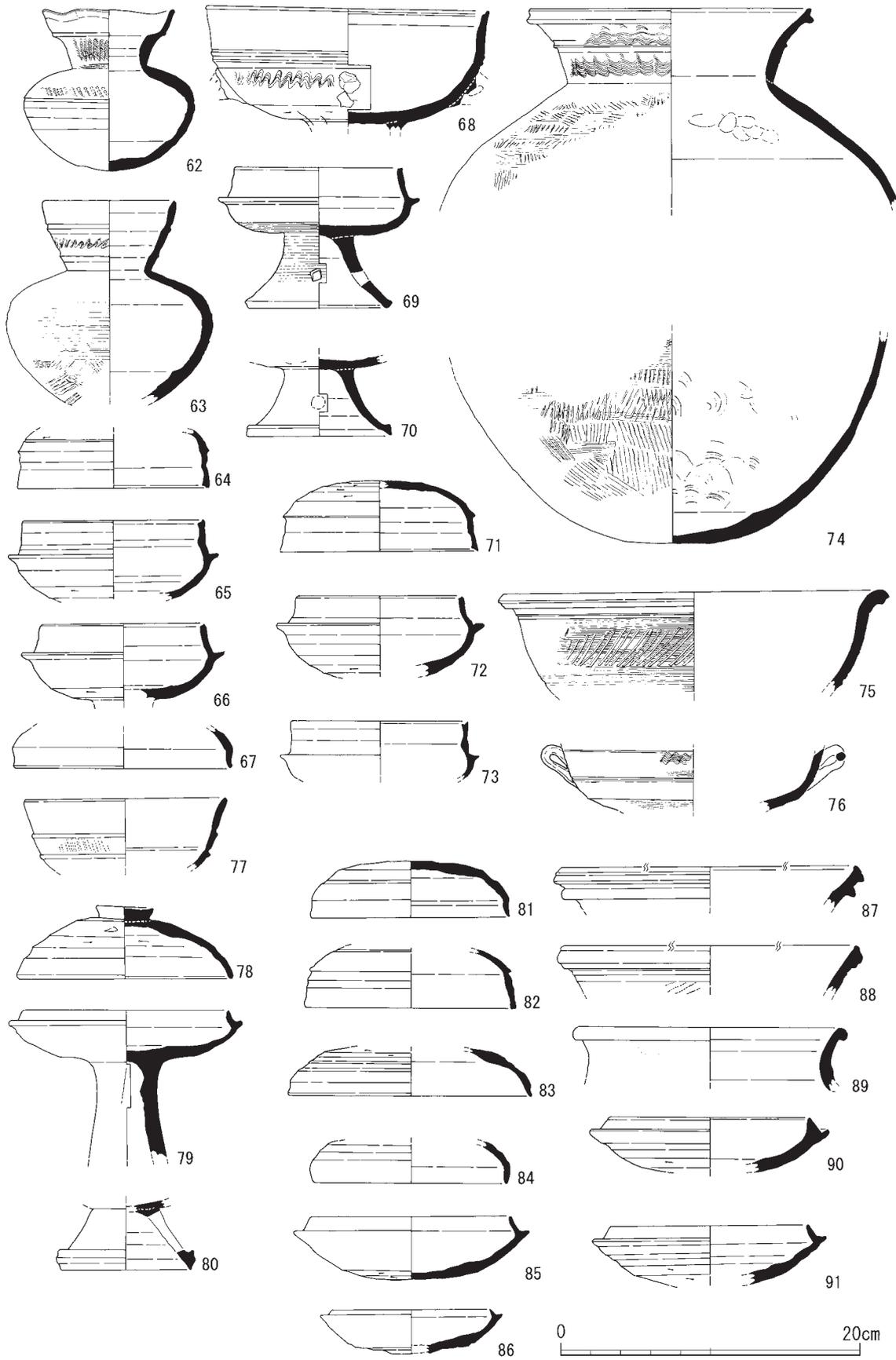
第19図31～37は、受口状口縁をなす甕である。いずれも口縁部外面、あるいは肩部に櫛描列点文がみとめられる。口縁部の形状には、擬口縁を外方に大きく引き出し明瞭な受部をもつもの(37)

が細片のなかにみられるが、全体に受部の引き出しは弱く、短く上方に立ち上がるものを主体とする。30は、やや肩が張り、鉢に近いプロポーションをもつが、口径値が大きく甕とした。31・35は短い立ち上がりをもつ甕のなかでも、受部の屈曲が明瞭なものである。ともににぶい黄橙褐色を呈する。一方、34・36は、いずれも口縁部の立ち上がりが緩やかで、受部にやや厚みをもつ。34は、肩部に櫛描直線文と櫛描列点文を施し、口縁外面にわずかに櫛描列点文が認められる。36は、肩部にのみ櫛描列点文を施し、口縁部外面はナデ調整で仕上げる。色調は、橙褐色を呈する。37は、器壁の摩耗が著しいが、受部が短く、口縁部の立ち上がりがシャープである。受口状口縁甕の胎土は、いずれも石英・長石・チャートなどが含まれる在地土器の基本組成であり、湖南地域などからの明らかな搬入品として確認できるものはみられない。

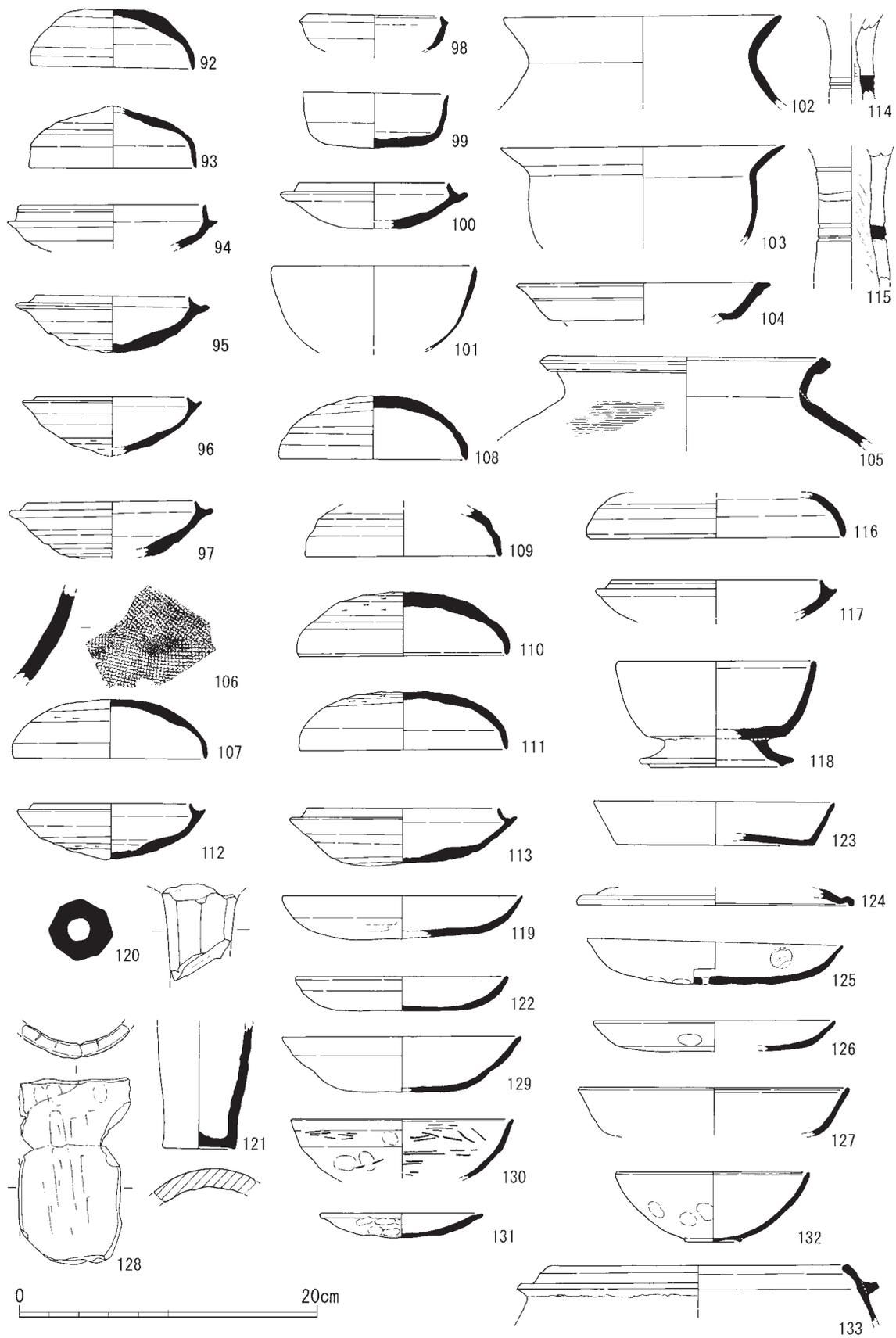
第19図41～48、第20図50・51は高杯である。大・中形品(41～46)と小形品(47・50・51)が認められる。41～43は大形の高杯の口縁部である。いずれも皿状の杯部を特徴とする。2次口縁が外反するもの(41・42)と、直線的に伸びるもの(43)がある。後者は擬口縁の上部に2次口縁を接合し、下部を外面に出し、稜をなすタイプで、杯部の成形に前者と異なる手法が認められる。いずれも摩耗が著しいが、41は外面に細かな縦方向のミガキが認められる。44～46は、高杯の脚の一部である。41～43と接合点はなく、また色調にも違いが認められることから、同一個体として認識できるものは確認できない。41は橙褐色を、42・43はにぶい黄橙褐色を呈する。48は、高杯の脚部の一部である。脚部の上端に横方向の沈線が施されることから、東海系高杯と考えられる。色調は、にぶい橙色を呈する。また49は、高杯ないしは器台の脚部とみられる。摩耗が著しいが、5条の櫛描直線文が認められ、広義の東海系の範疇でとらえられる土器である。色調は、にぶい黄褐色を呈する。47・50・51は、小形の高杯である。50は、杯部の口径は大きく開かないタイプで、緩やかに裾状に開く脚部をもつとみられる。

第20図52～61は、いずれも鉢である。54は、台付鉢で、緩やかに外反する口縁部を特徴とする。鉢部と脚部に明瞭な接合点は確認できないが、色調や調整から同一個体とみられる。摩耗が著しいが、杯部外面にわずかにミガキがみとめられる。52・53は、受口状口縁をなす鉢である。52は近江系の特徴をよく残し、口縁部外面に櫛描列点文が認められるが、53は口縁部の受部が浅く、ナデ調整で仕上げられており、近江系の文様要素はすでに残していない。小形鉢には、口縁部が緩やかに外方に伸びるもの(56・57)と、内湾気味に立ち上がるもの(58～60)がある。さらに後者は、内外面をミガキあるはナデを施すもの(58・59)と、タタキ成形によるもの(60)がみられる。61は、前者の体部とみられる。

第3トレンチ溝SD44から出土した土器の帰属時期は、高杯の口径が大きく皿状を呈するものが主体であるが、脚部に長脚の著しいものがみとめられないこと、甕の組成はタタキ成形甕と外面ハケ調整甕がそれぞれ35%前後(受口状口縁甕約25%)と拮抗していること、受口状口縁鉢の体部最大径が肩部にあり器高が高いこと、またタタキ成形による小形鉢を含むことなどから、弥生時代後期後葉に帰属する一群とみられる。その時期幅は比較的短いとみられ、おおよそ山城地域の佐山遺跡土器編年I式-2～3段階、山城Ⅲ～Ⅳ期に併行するものと考えられる(高野2003・吹



第21図 出土遺物実測図(4)



第22図 出土遺物実測図(5)

田2006)。

(高野陽子)

## 2) 古墳時代～飛鳥時代の遺物(第21図、図版第19・20)

古墳時代の遺物は竪穴式住居跡のほか、土坑、掘立柱建物の柱穴から少量出土した。

**竪穴式住居跡 S H12出土遺物(第21図62～74)** S H12からは須恵器甕・甕・杯身・杯蓋・無蓋高杯・有蓋高杯、土師器甕などが出土しているが、土師器甕については細片であり図示できなかった。S H12は検出遺構で記述したように2基の竪穴式住居跡で、S H12-Bの下層でS H12-Aを検出している。S H12-Bに帰属する可能性が高いものには、62～66・68～72・74があり、S H12-Aに帰属する可能性が高いものに、67・73・75がある。

須恵器甕62は扁球形の体部で直立ぎみに立ち上がる頸部から口縁部は水平ぎみに外反したのち、直立ぎみに立ち上がる。頸部外面には櫛描波状文、体部肩には列点文を加飾している。口径9cm、器高11cmを測る。須恵器甕63は、口径9cm、器高14cmを測るもので、肩部の張った体部から頸部は斜め上方に立ち上がり、口縁部は頸部からわずかに屈曲し、口縁端部は尖り気味におわる。頸部外面には、2条の稜線を持ち、その間に櫛描き波状文を加飾している。杯身66・72・73は椀状を呈する体部から水平ぎみにのびる受け部で、口縁部は直立するもの(66・73)と、やや内傾ぎみに長く立ち上がるもの(72)がある。口縁端部は内傾ぎみに面をもつもの(66・72)と沈線状にくぼみをもつもの(73)がある。杯部外面の2分の1程度の範囲にヘラケズリが認められる。杯蓋64・71は、口径12～13cm、器高5.0～5.5cmを測るもので、やや丸みをもつ天井部から垂下する口縁部へ続き、口縁端部は内傾する面をもつもの(71)と沈線状に凹むもの(64)がある。口縁部と天井部の境には明瞭な稜を設けている。杯蓋67は天井部が欠損しており、口縁部は外反ぎみに屈曲する。67は上層からの混入の可能性が高い資料である。無蓋高杯68は椀状の杯部で口縁部は直立ぎみに立ち上がり、口縁端部は尖り気味におわる。杯部下半には3条の沈線文とその下に櫛描き波状文を加飾する。また縦位の環状把手があったものと思われる。脚部は裾開きで方形透孔をもつものと思われるが、欠損している。有蓋高杯69は口径11.6cm、器高9.6cmを測るもので、腰部の張った体部から水平ぎみにのびる受け部を呈し、口縁部は斜め上方に長く立ち上がる。脚部は裾広がりの中位に方形透孔を設けている。脚部外面の上半にはかき目が施されている。有蓋高杯66は脚部を欠損した高杯で、杯部は69と同じ形態のものである。70は有蓋高杯の脚部と思われるもので、脚端部は上・下方に肥厚させて面をつくっている。甕74は球形に近い体部で、口頸部は外反ぎみに立ち上がり、口縁端部は上・下方に肥厚して面を設けている。口頸部外面には2条の沈線とその上・下方に櫛描き波状文を加飾している。器台75は包含層出土資料であるが、S H12に帰属する可能性のある資料である。台部から内湾ぎみに深く立ち上がり、口縁部は水平気味に短く外反する。口縁端部は下方に肥厚して面を作る。台部外面には上方に1条、下方に2条の沈線が巡り、その間に斜方するかき目を丁寧な施している。

竪穴式住居跡 S H12は出土した須恵器の特徴から田辺陶邑編年のTK23型式と思われる。

**竪穴式住居跡 S H26出土遺物(第21図76・85・87～90)** S H26からも土師器が出土しているが、細片であり図示できる資料がなく、須恵器のみを図示した。須恵器は杯身・杯蓋・有蓋高杯・蓋・

無蓋高杯・甕などがある。杯身85・90は半球形の底部から受け部は三角形状に短くのび、口縁部は斜め方向に短く立ち上がる。底部外面の3分の1以下の範囲に削りを施している。85は口径8.4cm、器高4.2cm、90は口径8.6cm、器高4cmを測る。杯蓋81～84は丸みをもつ天井部から開きぎみの口縁部へ続くもので、口縁部と天井部の境に明瞭な稜を設ける古相のもの(82)と、稜を設けないTK43・TK209の新相のもの(81・83・84)がある。76は無蓋高杯の杯部下半部で、2条の沈線間に櫛描波状文が認められ、外面には縦位の把手を2か所に貼り付けている。無蓋高杯77は口径13.6cmを測るもので、椀状の杯部を持ち、口縁部は斜め方向に直線的に立ち上がる。杯部中位には二条の低い突帯とその間に櫛描き文を加飾している。有蓋高杯79は扁平な杯部で口縁部は短く立ち上がるもので口径13.5cm、杯部高3.6cmを測る。脚部は高い脚部で方形の透孔を設けている。杯蓋78は有蓋高杯79とセットになる可能性が高いものである。球形を呈する天井部をなし、中央にくぼみを持つつまみを貼り付けている。口径14.6cm、器高4.8cmを測る。高杯脚部80は裾広がり短いもので、脚端部は上・下部が肥厚して面をつくる。脚部は方形の透孔を設けている。87～89は甕あるいは壺の口縁部片で直線的に外反する口縁部で、口縁端部は尖りぎみに終わるもの(87・88)と直立ぎみに立ち上がる頸部で口縁端部を丸くおさめるもの(89)がある。SH26から出土した須恵器は、76・77・80・82は古相を呈しており、SH12からの混入と思われるもので、多くのものは田辺陶邑編年のTK43型式に属するものと思われる。

**竪穴式住居跡SH29出土遺物(第22図92～104)** 第2トレンチ東区西端で検出した竪穴式住居跡で、竪穴式住居跡内から須恵器杯身・杯蓋・椀、土師器甕・椀が出土した。杯身94～97・100は口径10cm前後、器高3.2～3.8cmを測るもので、口縁部は斜め方向に短く立ち上がる。杯蓋92・93は口径11cm前後、器高4cm前後を測るもので、口縁部は尖りぎみに垂下し、天井部は円弧状を呈するものである。法量・形態からみて95～97・100と同時期の杯蓋である。椀98は内湾ぎみに立ち上がる体部から口縁部は内側に短く屈曲するもので、高杯の杯部とも考えられるものである。椀99は底部から直立ぎみ立ち上がり、口縁部に続くものである。口縁端部はわずかに外反する。104は細片のため不明瞭ではあるが、須恵器甕の口縁部片と思われるものである。口縁部は、水平ぎみに伸びた後、外上方向に直線的に立ち上がり、口縁部端は水平ぎみに肥厚する。口径17.2cmを測る。土師器椀101は内湾ぎみに立ち上がる深い椀状を呈し、口縁部端は尖り気味に終わる。土師器甕102・103は体部から口縁部が「く」の字形に屈曲するものである。102は体部径が口縁部径を凌駕するが、103は口縁部径が体部径を凌駕する。SH29から出土した遺物には、104など古相のものも含まれるが、その多くは、田辺陶邑編年のTK209型式～飛鳥1期に属するものと思われる。

**掘立柱建物跡SB03出土遺物(第22図118)** SB03の各柱穴内からは土師器、須恵器の細片が出土したが、図示できたのはP4から出土した台付鉢118の須恵器である。118は水平ぎみに延びる底部から、斜め上方に内湾ぎみに立ち上がる杯部に続き、口縁端部は丸みを持って終わる。脚部は、斜め下方に裾開きとなり、端部は外方に肥厚するものである。口径13.4cm、器高7.2cmを測る。田辺陶邑編年のTK217型式、6世紀末～7世紀初めのものと思われる。

掘立柱建物跡 S B04出土遺物(第22図115・116) S B04の柱穴内からは、土師器・須恵器の細片が大半であったが、図示できたのは、P5から出土した高杯柱状部(115)と柱穴P25内から須恵器杯蓋(116)である。115は須恵器高杯の柱状部で、2段の長方形透孔があり、外面には2条の沈線が巡る。116は丸みを持つ天井部は欠損している。口縁部は内湾ぎみに垂下するもので、口縁部端は丸みを持って終わる。

掘立柱建物跡 S B05出土遺物(第22図114) S B04と同様、各柱穴内からは土師器・須恵器の細片が出土したが、図示できたのは、P2から出土した1点(114)のみである。114は須恵器高杯の柱状部で、2段透孔の間に1条の沈線が巡る。

掘立柱建物跡 S B06出土遺物(第22図117) S B06の柱穴P1から出土したもので、口径14.2cmを測る。水平ぎみに短く伸びる受け部から、口縁部は断面三角形状に短く立ち上がる。

土坑 S K87出土遺物(第22図107・108) S K87からは図示できる資料として古墳時代後期の須恵器杯蓋(107・108)が出土した。107・108は丸みをもつ天井部から口縁部はやや広がりぎみとなり、口縁部端は尖りぎみに終わる。

土坑 S K30出土遺物(第22図109) S K30では土師器・須恵器の細片が出土しているが、図示できたのは古墳時代後期の須恵器杯蓋の細片が1点である。109は、口縁部は広がりぎみで、口縁部端は尖りぎみに終わる。

第2トレンチ包含層出土遺物(第21図86・91、第22図105・106・110～118) 第2トレンチ東区では竪穴式住居跡が集中して存在しており、竪穴式住居跡の遺構検出作業時に古墳時代後期の須恵器・土師器が出土した。数基からなる竪穴式住居跡に帰属する可能性もあるが明確ではないため、ここでは包含層資料として図示した。86は須恵器杯身で、口径10.5cm、器高4.0cmを測るもので、口縁部は断面三角形状で短く立ち上がる。91は口径13.2cm、器高4cm以上を測るもので、受け部は水平ぎみに短く延び、口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。105は須恵器壺の口縁部片である。ナデ肩の体部で口頸部は外反する口縁部に続く。口縁部端は肥厚して、外面に面をもつものである。口径19.6cmを測る。106は甕の体部下半部と思われるもので、赤褐色を呈し、細かいタタキが施されたもので、韓式土器と思われる。110・111は須恵器杯蓋で、丸みを持つ天井部から口縁部と続くもので、口縁部端は尖りぎみにおわる。112・113は須恵器杯身で、口縁部は断面三角形状を呈し、短く立ち上がるものである。112は口径10.5cm、器高3.8cm、113は口径12.8cm、器高4.0cmを測る。

### 3) 古代～中世の遺物(第22図、図版第20)

西三坊大路西側溝 S D01出土遺物(第22図119、図版第19) 第1トレンチ S D01は西三坊大路西側溝の可能性が高い溝であり、溝内からは土師器皿・須恵器壺などが出土したが、図示できたのは1点のみである。土師器皿119は口径16.0cm、器高2.0cm前後で、口縁部は尖りぎみに終わる。外面下半にはていねいな削り調整を施している。

宅地内区画溝 S D25出土遺物(第22図120～124、図版第20-(2)) 第1トレンチ S D25は宅地内区画溝の可能性のある遺構で、S D25からは土師器皿・高杯・甕、須恵器杯A・杯蓋・壺・甕

などが出土したが、細片が多く図示できる資料は5点である。土師器皿122は口径4.0cm、器高2.3cmを測り、口縁部は尖り気味におわる。外面調整は摩滅により不明。土師器高杯120は柱部のみで、中空で外面は八面体に成形している。須恵器杯A123は斜め上方に直線的に立ちあがるもので、口径16.2cm、器高3.0cmを測る。須恵器杯蓋124は天井部が欠損しているが宝球形のつまみをもつものと思われるもので、口縁部は屈曲したのち口縁端部はやや内側に巻き込むように肥厚する。口径13.6cmを測るが、細片である。須恵器壺G121は平底の底部で直立ぎみに高く立ち上がる体部で、口頸部は欠損しているが直線的に長く立ち上がるもので、長岡京期に特徴的な壺である。

土坑S K 18出土遺物(第22図131) 第1トレンチS K 18からは、図示できる遺物として、土師器皿131がある。131は口径11.0cm、器高1.6cmを測るもので、丸底ぎみの底部から口縁部は水平に延びる。

溝S D 28出土遺物(第22図132・133、図版第20-(2)) 第2トレンチS D 28からは土師器、須恵器、瓦器、白磁の細片が出土しており、図示し得たのは2点である。132は口径13.0cm、器高4.8cmで、底部には断面三角形の低い高台を貼り付けた瓦器椀である。133は口径20.0cmを測る羽釜で、口縁部は内湾ぎみとなる。

井戸S E 01出土遺物(第22図125～127、図版第20-(2)) 第2トレンチS E 01からは、土師器皿・甕・高杯、須恵器壺の各細片が出土したが、図示できるのは土師器皿125～127である。125は口径17.0cm、器高2.8cmを測るもので、口縁部はなで調整を施している。125の底部には円形の穴が穿たれている。126は口径16.2cm、器高2.0cm前後を測る。127は口径18.0cm、器高3.2cm以上で、皿125・126よりも口径がやや大きく器高も深いものである。土師器皿の特徴から平安時代前期のものと思われる。

第2トレンチ包含層出土遺物(第22図129・130) 129は口径16.0cmを測る白色系の土師器である。130は口径15.0cmを測る瓦器椀で、内外面に粗いミガキを施している。

第3トレンチ包含層出土遺物(第22図128、図版第20-(2)) 第3トレンチS D 44の最上層で、奈良時代の土師器・須恵器等を含む整地層から出土したもので、直径約10cm、厚さ約1cmを測る土師質で、円筒管状の不明土製品である。

## 5. まとめ

これまでの長岡京跡・井ノ内遺跡の調査では弥生時代の遺構・遺物の検出例がなかったが、今回の第3・第4トレンチで弥生時代後期の溝を検出した。この溝は円弧を描くように掘り込まれており、堅穴式住居跡などは検出されていないが、弥生時代後期の集落を画する溝の可能性が高く、第3・第4トレンチの東側に集落が存在するものと思われる。

溝S D 04と溝S D 44はほぼ規模、形態、土壌堆積、遺物出土状況等が類似しており、一連の湾曲する溝と推定される。過去数回におよぶ調査(右京第21・27・615次調査)の結果と今回の調査を総合的に判断すると、大溝は環濠の可能性が窺われる。遺構の立地は段丘面にあることから、東側には弥生時代後期の大規模な集落があったものと想定される。

古墳時代前期の様相は明らかではないが、古墳時代中期後葉～後期末の竪穴式住居跡が4基検出されている。後期の集落に関しては、近接した井ノ内所在の古墳群との関連がこれまでも指摘されていたが、今回の調査成果から、第2トレンチにまで広がることが明らかとなった。

第2トレンチ西区で検出された総柱建物S B05・06は、倉庫棟である可能性が高い。総柱建物S B05・06とも真北に対して、総柱建物S B05は28°、S B06は17°30'、S B07は15°、いずれも西側に振れる。この2棟の建物は、竪穴式住居と複数回の重複がみられ、住居跡の主軸は差ほど変わらないことから、時間を空けずに建て替えが行われたものと思われる。また、これらの柱穴内からは、古墳時代後期の土師器・須恵器がわずかながら出土した。出土量が少なく、積極的な根拠は乏しいが、竪穴式住居と相前後した時期に作られた倉庫棟である可能性が高いと考えられる。

長岡京以前の奈良時代の遺構にはこれまでに溝などを検出しているが、今回新たに掘立柱建物跡を検出し、奈良時代の様相が明らかとなった。ただ、奈良時代後期の遺物と長岡京期の遺物の峻別が明確でなく、長岡京期の建物や溝であった可能性も十分考えられるものである。第2トレンチから出土した奈良時代の掘立柱建物跡は奈良時代を通じて3～4回の建て替えが見られ、今里遺跡の広がりや検討される重要な資料である。

長岡京期、条坊に伴うものとして第1トレンチで検出した溝S D01・S D25がある。この2条の溝の検出によって、西三坊大路の規模(路面幅)がほぼ判明した。これは右京第83・105次発掘調査で検出した溝S D8315(推定西三坊大路の東側溝)の溝心の座標はX=-118,400.4でY=-28,434.0であることから、西三坊大路の路面幅が今回の調査成果から類推すると24mとなるもので、(財)京都市埋蔵文化財研究所が実施した右京第772・775次調査(上里遺跡内)の資料(溝10=西三坊大路西側溝、溝11=宅地区画溝)と酷似するものである。

今回調査した第1トレンチの溝S D01と右京第772・775次調査で検出した溝10とは、南北方向でその直線距離は約670mと離れているが、両溝の心々の座標は、Y座標値の差が0.3mであり、振れ角はN-0°01'31"-Wである。右京第772・775次調査では西三坊大路の東側溝は検出されなかったが、西三坊大路に関連して真南北方向の柵列が見つかった。この柵列の座標値はY=-28,433.9で、と築地心(座標Y=-28,433.9)との間隔が30mと報告されている。この資料に類似する長岡京跡左京第361次調査では、東三坊大路の西側築地心と東側溝の柵の間隔が30m、路面幅25mの結果が得られており、長岡京跡西三坊大路の道(路面)幅が24m(8丈)であることが判明した。

第1トレンチで検出した溝S D25は宅地区画溝で、溝S D01との空間地は築地堀の存在が想定できる。長岡京跡右京第772・775次調査(上里遺跡内)の宅地区画溝と酷似し、築地跡も想定されている。今回の調査地(三条四坊二町)は大路に面する宅地に邸宅・官衙等の存在が推察される。

今回の調査地(井ノ内地区)では、過去の調査例の多さに比して、長岡京跡に関連する条坊道路等の遺構が余りにも検出例が少ないのが現状である。今回の調査は西山丘陵から派生する舌状の段丘崖(傾斜変換線)にあたる今里遺跡であり、右京第772・775次調査は上里遺跡である。井

ノ内遺跡の西部、西南部においては三坊大路の造作が困難であったかもしれない。また、旧乙訓社に比定される地であり、井ノ内車塚、井ノ内稲荷塚古墳をはじめ古墳群が多く、「聖地」として強く意識されていたかもしれない。(竹井治雄)

参考文献

- 奥村清一郎ほか「長岡京跡右京第27次発掘調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(1980-2) 京都府教育委員会) 1980
- 山口 博「長岡京跡右京第83次発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第3冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 竹井治雄「長岡京跡右京第615次発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第89冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 網伸也・百瀬正恒「長岡京跡右京二条四坊一町跡・上里遺跡」(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報(2003-4)』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 2003
- 高野陽子「(3)土器の編年」(『京都府遺跡調査報告書 佐山遺跡』第33冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 増田孝彦「長岡京跡右京第830次・上里遺跡・井ノ内遺跡発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第117冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006
- 吹田直子「山城地域」(『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター) 2006
- 竹井治雄「長岡京跡右京第889次・井ノ内遺跡発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第122冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007

# 圖 版



(1) 第 1・5 トレンチ調査前風景  
(東から)



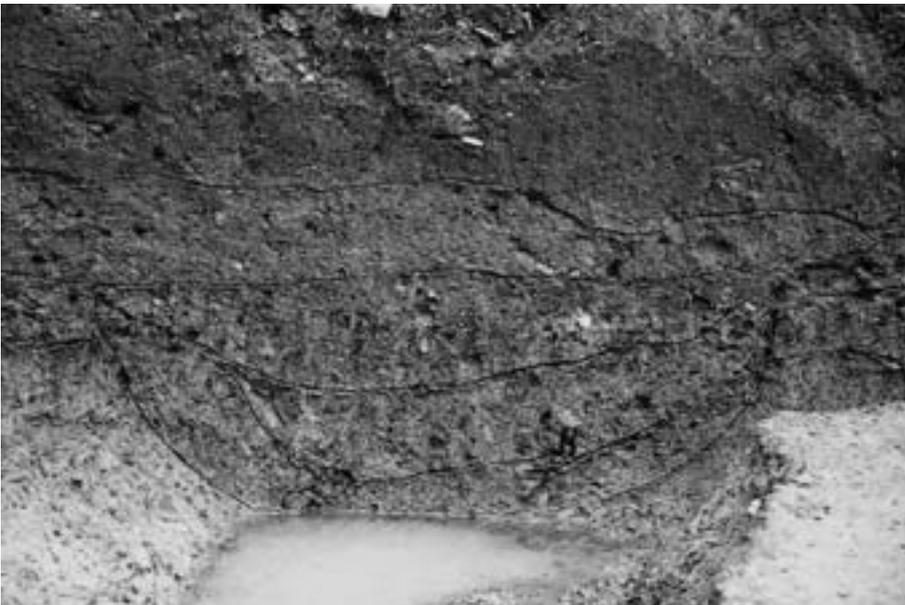
(2) 第 1 トレンチ全景(西から)



(3) 第 1 トレンチ溝 SD01  
(西三坊大路西側溝、南から)



(1) 第 1 トレンチ溝 SD01  
(西三坊大路西側溝)  
土器出土状況(上が東)



(2) 第 1 トレンチ溝 SD01  
(西三坊大路西側溝)  
土層堆積状況(北から)



(3) 第 1 トレンチ溝 SD25  
(宅地内溝)検出状況(南から)

(1) 第 1 トレンチ溝 SD25  
(宅地内溝) 完掘状況(北から)



(2) 第 1 トレンチ土坑 SK18  
土層堆積状況(北から)



(3) 第 1 トレンチ溝 SD01  
偶蹄動物足跡





(1) 第 2 トレンチ調査前全景  
(西から)



(2) 第 2 トレンチ西区西半部全景  
(東から)



(3) 第 2 トレンチ掘立柱建物跡  
SB05(北東から)



(1) 第 2 トレンチ西区東半部全景  
(西から)



(2) 第 2 トレンチ西区掘立柱建物跡  
SB06(東から)



(3) 第 2 トレンチ西区掘立柱建物跡  
SB06-P3 検出状況 (上が西)



(1) 第 2 トレンチ中区全体  
(西から)



(2) 第 2 トレンチ中区井戸 SE01・  
柱穴群検出状況(西から)



(3) 第 2 トレンチ中区井戸 SE01  
完掘状況(東から)

(1) 第 2 トレンチ東区全体  
(西から)

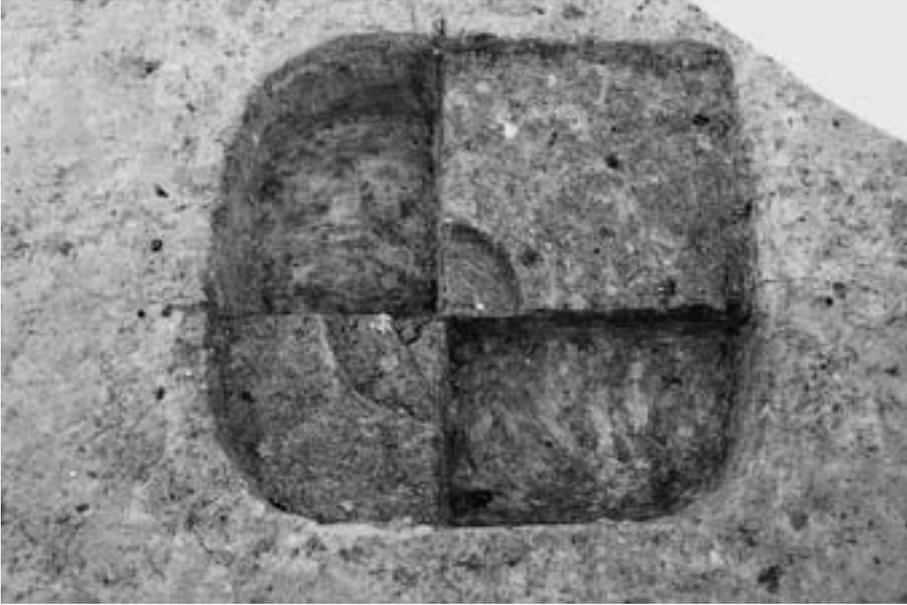


(2) 第 2 トレンチ東区掘立柱建物跡  
SB03・04 検出状況(東から)



(3) 第 2 トレンチ東区掘立柱建物跡  
SB03・04 完掘状況(西から)

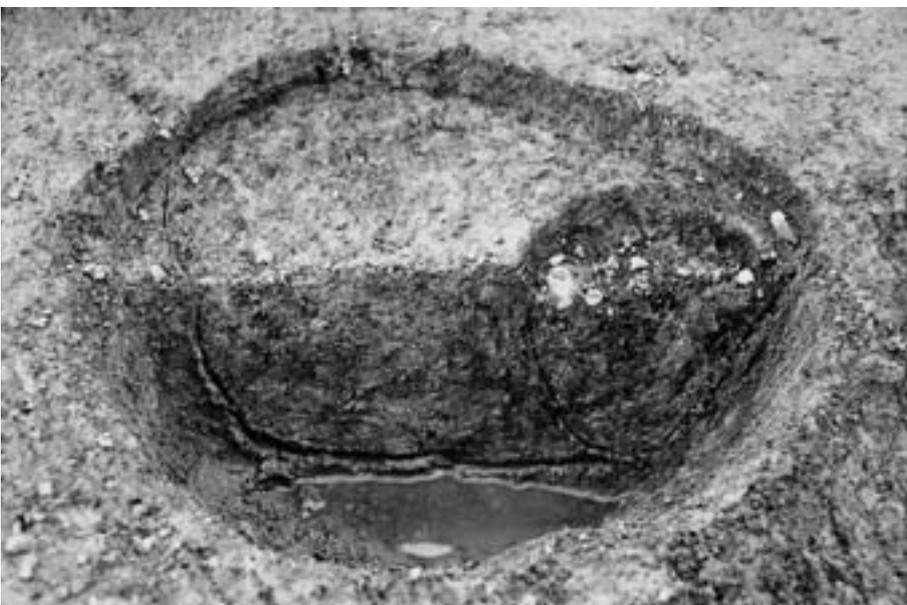




(1) 第 2 トレンチ東区掘立柱建物跡  
SB03-P24 検出状況(上が北)



(2) 第 2 トレンチ東区 SK91  
土層堆積状況(南から)



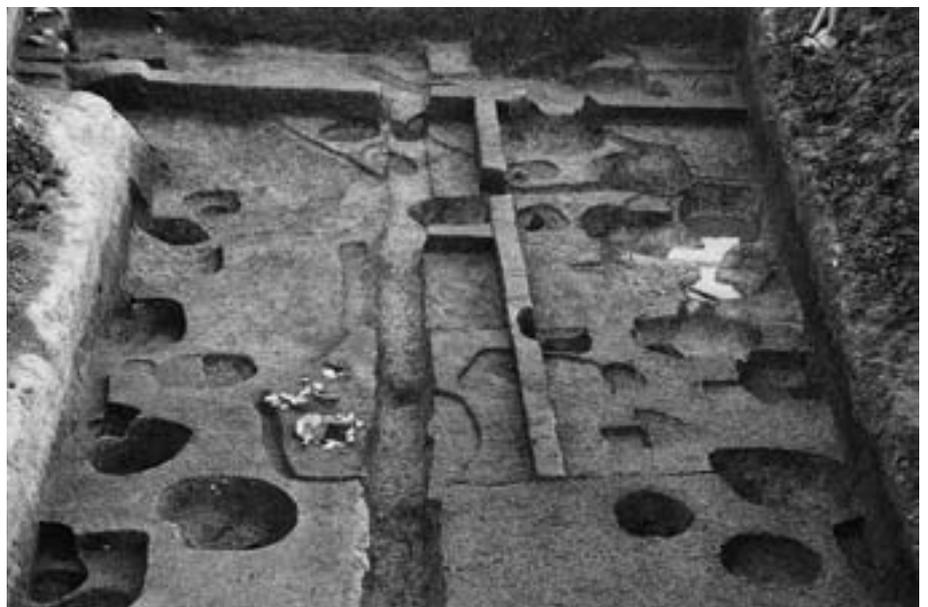
(3) 第 2 トレンチ東区掘立柱建物跡  
SB06-P3 土層堆積状況  
(南から)



(1) 第 2 トレンチ東区全体完掘状況  
(東から)



(2) 第 2 トレンチ東区竪穴式住居跡  
SH26(東から)



(3) 第 2 トレンチ東区竪穴式住居跡  
SH12-A・B、SH26  
完掘状況(西から)



(1) 第 2 トレンチ東区竪穴式住居跡  
SH12-A・B (南から)



(2) 第 2 トレンチ東区竪穴式住居跡  
SH12-B (北から)



(3) 第 2 トレンチ東区竪穴式住居跡  
SH12-B 土器出土状況  
(西から)



(1) 第 2 トレンチ東区竪穴式住居跡  
SH12-B 土器出土状況  
(南西から)



(2) 第 2 トレンチ東区竪穴式住居跡  
SH12-B 土器出土状況(部分)  
(南から)



(3) 第 2 トレンチ東区土坑 SK91  
(主柱穴)土器出土状況  
(上が東)



(1) 第 3 トレンチ全景(南から)



(2) 第 3 トレンチ柱穴群検出状況  
(上が南)



(3) 第 3 トレンチ溝 SD44  
(南西から)



(1) 第 3 トレンチ溝 SD44 南半部  
土器出土状況(北東から)



(2) 第 3 トレンチ溝 SD44 北半部  
土器出土状況(南から)



(3) 第 3 トレンチ溝 SD44 南半部  
土器出土状況(部分、北西から)



(1) 第 3 トレンチ溝 SD44 南半部  
土器出土状況(部分、上が南)



(2) 第 3 トレンチ溝 SD44 北半部  
土器出土状況(部分、上が北)



(3) 第 3 トレンチ溝 SD44 北半部  
土器出土状況(上が西)



(1) 第 3 トレンチ溝 SD44 完掘状況  
(北から)



(2) 第 3 トレンチ溝 SD44 完掘状況  
(南西から)



(3) 第 5 トレンチ全景(西から)



(1) 第 4 トレンチ全景(東から)

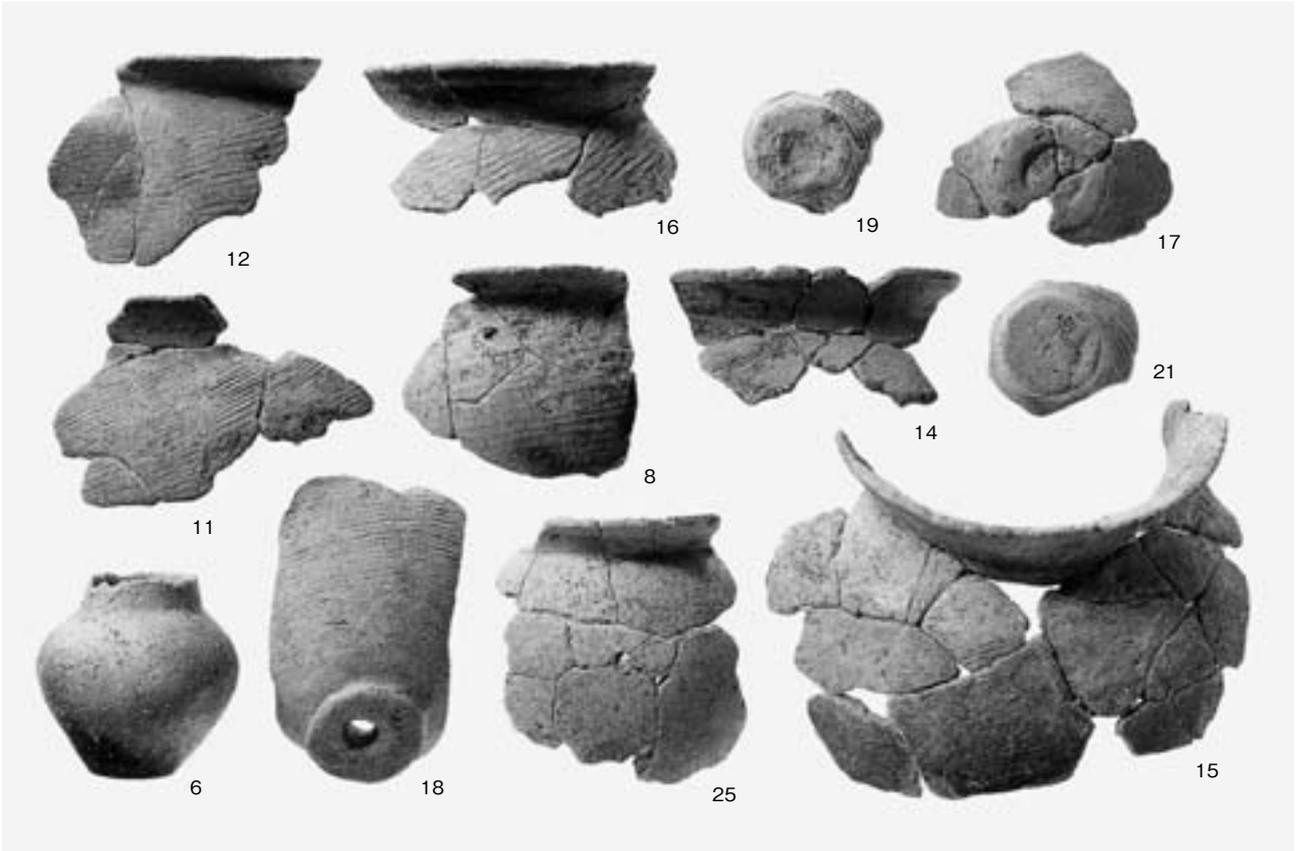


(2) 第 4 トレンチ溝 SD04 全景  
(東から)

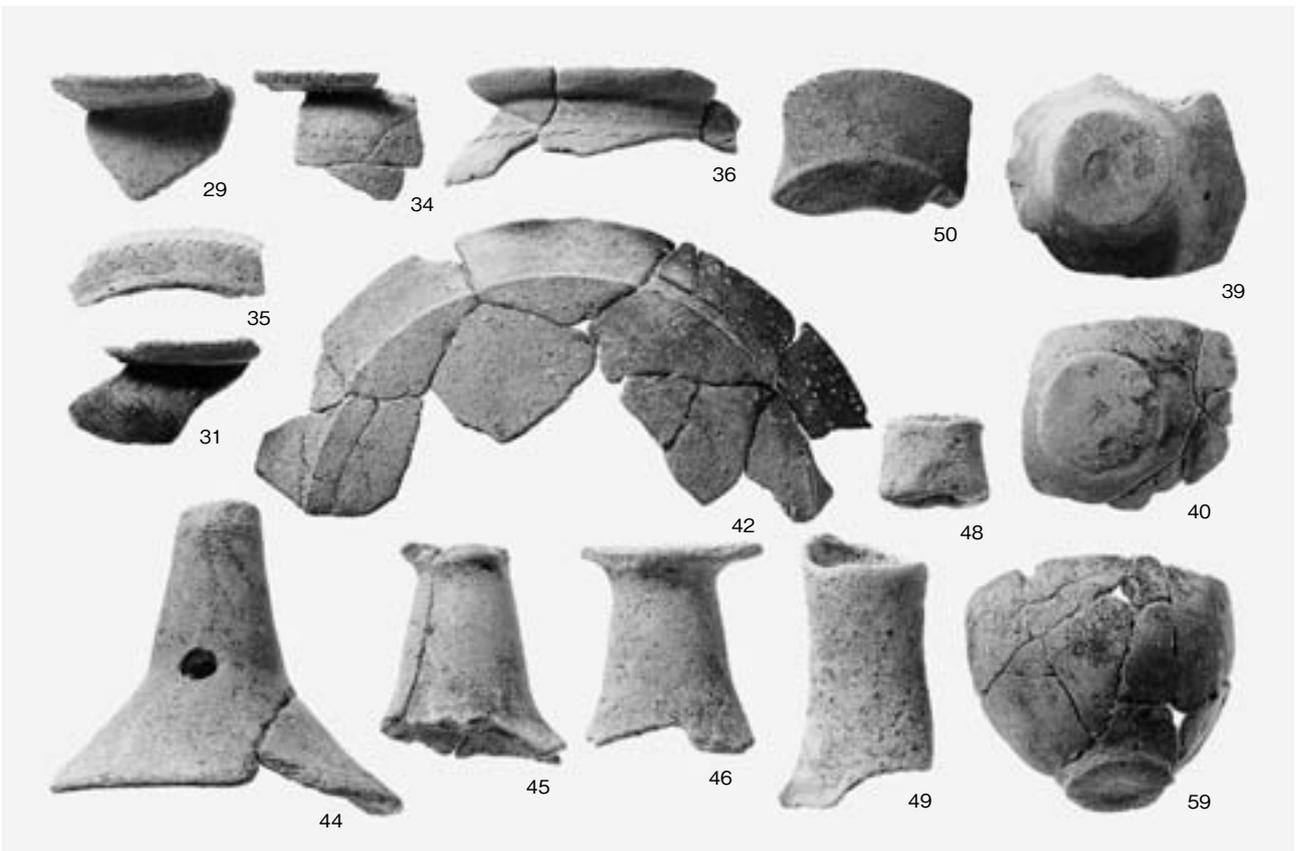


(3) 第 4 トレンチ溝 SD04 全景  
完掘状況(北西から)



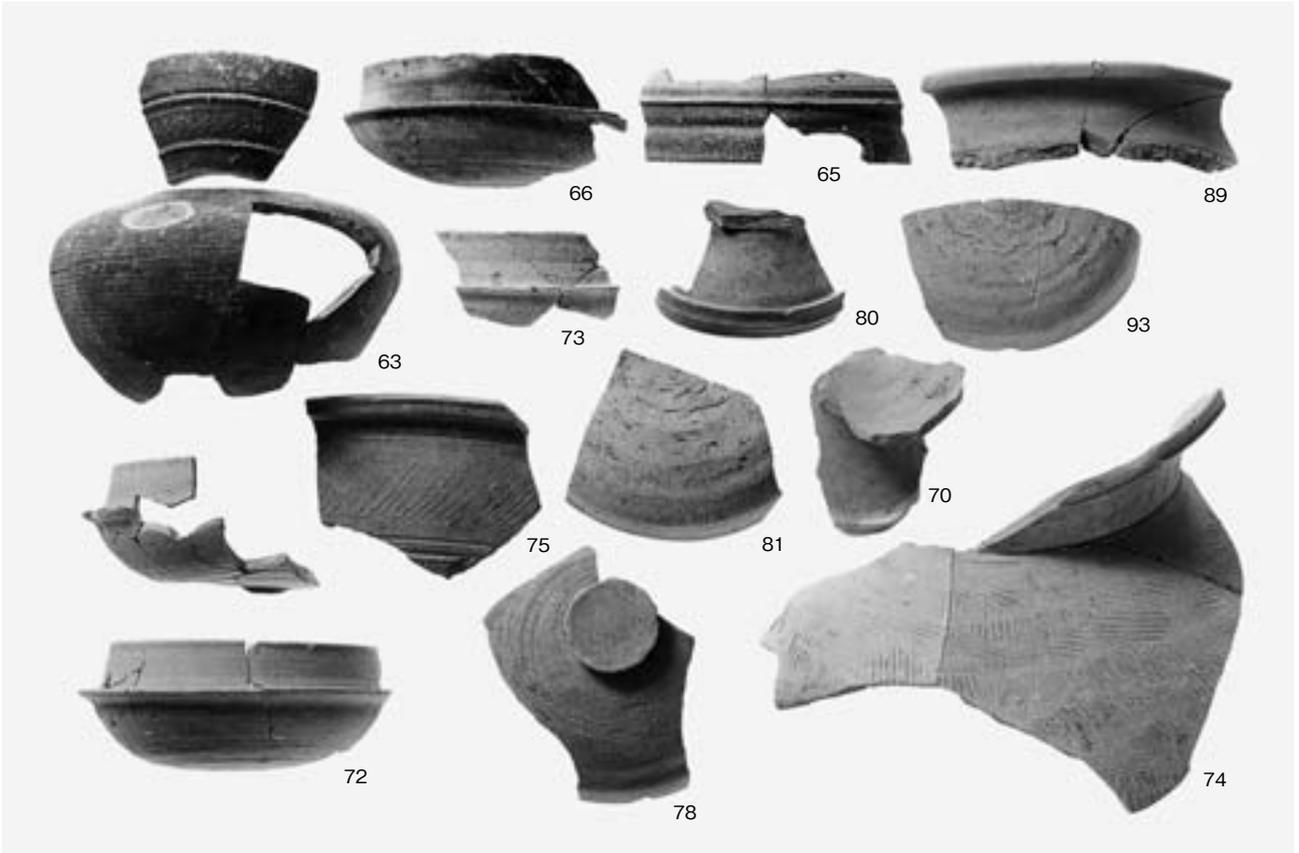


(1)出土遺物(2)

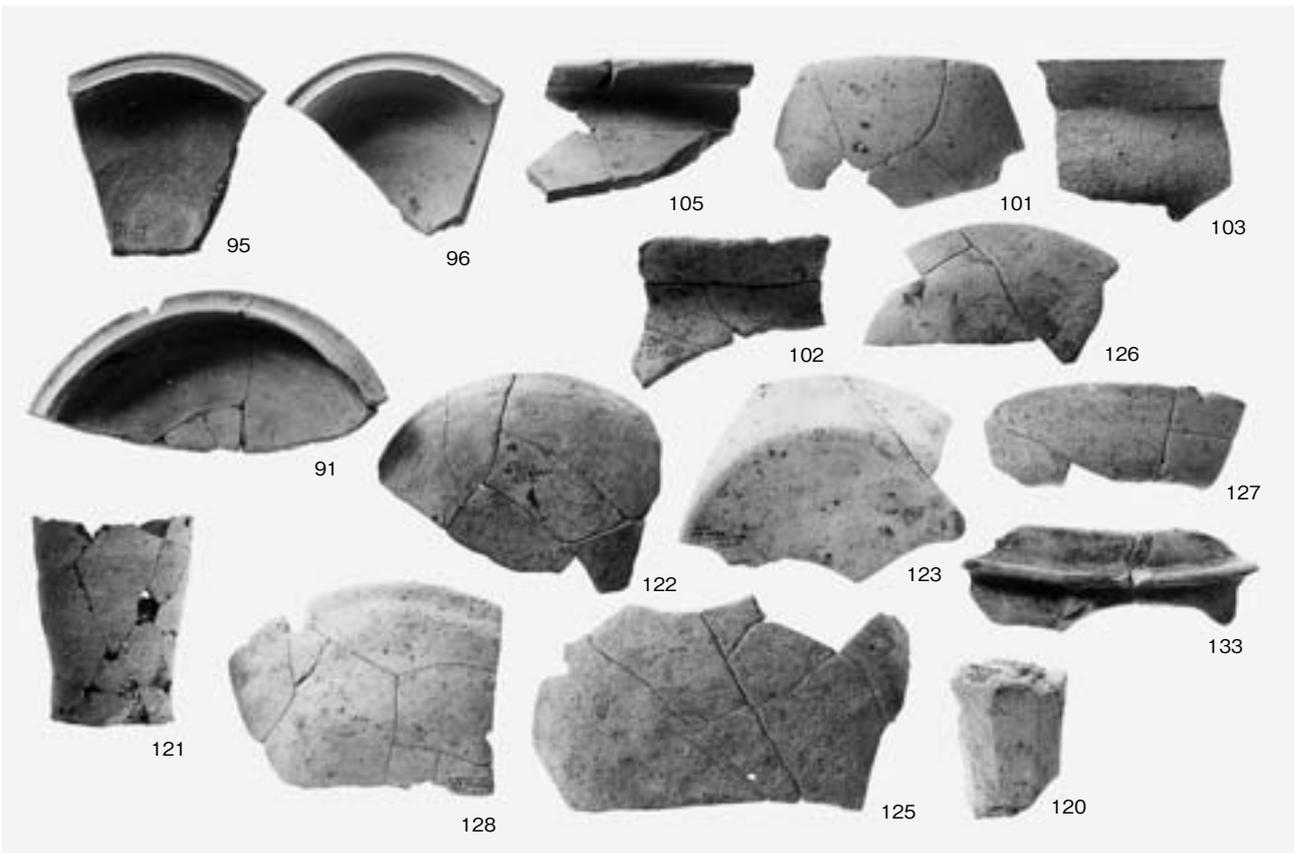


(2)出土遺物(3)





(1) 出土遺物(5)



(2) 出土遺物(6)

京都府遺跡調査報告集 第 137 冊

平成22年 3 月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141